

竹内先生と私

今回竹内先生から「彗星日記」の原稿をお預りした時に、先生の原稿の後半に、煙洲会々員の方々から竹内先生に関する原稿を募集して載せさせて頂こうと考え、先生の御快諾を得て、急に煙洲会々員の皆様にお頼みしましたところ、早急のお願いにもかゝらず多くの方々から内容の豊かな原稿を頂戴し、まことにありがとうございました。

(村松)

煙洲会と竹内先生

電化大正十三年　　菅　　要　助

自ら名教自然を標榜し、自由啓発主義を以て教育方針とされた横浜高等工業学校初代校長煙洲鈴木達治先生が、昭和三十六年八月二十九日に御逝去されて既に二十六年を経ているが、先生の名をいただいた煙洲会は五二〇回を超えて今尚盛大に毎月続いているということは非常に意義深く喜ばしい事です。

その煙洲先生も晩年「私が長生きできたのは毎月の煙洲会のおかげだ。」と仰せられて居たことは会員の方々も御存知の事ですが、会に御出席いただいている竹内秀雄先生も全く同じ事をお話されています。

毎月の会を楽しみにして出席する為に自然と自分の健康に留意するようになるのではないでしょう。私も煙洲会に毎月出ると十年は長生きすると皆さんにも申し上げている次第です。

その竹内先生は昨年満九十歳を超えた年齢でハレー彗星と人生で二度の対面をしようとわざわざオーストラリア大陸まで出かけて行かれたという事は、その強い精神と体力とにまず驚くというより尊敬せざるを得ません。

「ユーリカ」と叫び「久し振りだなハレーさん……」と言うユーモアをまじえたスピーチも先生独得のものでした。

又先生は八十歳を超えてから『寄席の息子と英文学』『煙洲先生と横浜』『あの日あの時』と今回の『彗星日記』と続けて出版をされていますが、此は実にたいへんな事だと感じます。

原稿を書いてまとめて皆さんに読んでもらうために出版するという事は、頭脳も体力も健全でなければ出来ない訳ですから、全く敬服せざるを得ません。

若き日に商工実習校に職を奉じ煙洲先生との出会いを持たれた竹内先生が、煙洲教育をよく理解し協力されたというよりむしろ心酔されて我々横浜高工の学生教育に尽力された事は、今日煙洲会席上での先生のお話の中からも常にうかがい知ることが出来ます。竹内先生のような良い協力者を得た煙洲先生も幸せであつたし、又人生の良き師のもとで十分に教育活動が出来たであろう竹内先生も幸せであつた事だと推察します。

現在、竹内先生は最高齢の煙洲会員として毎月の例会に元気なお姿をみせて頂いています。此は我々会員にとっては非常な励みになることで、人生の御手本として身近かに先生を感じて我々も日常の起居生活を留意して行きたいものです。

先生が何時までも今日の様にお元気で煙洲会に出席して頂けるよう祈って止みません。

「芯」

横浜国立大学長 横 山 亨

毎年本学から発刊される横浜国立大学概要は、その沿革を始めとし本学の現況を内外に示す公的な冊子であります。その名誉教授の欄の筆頭に竹内秀雄と掲載されており、永いご勤務の間、昭和三十一年十一月より昭和三十五年四月に亘って本学の評議員ならびに分校主事の要職をも兼務されております。この欄に触れる度に昔日の本学を憶い、先生を始めとする先輩諸賢のご労苦を偲び、併せて今日の私共の本学への努力が十分であるかと反省するのであります。

竹内先生は神奈川県立横浜第一中学校（通称神中）から早稲田大学文学部英文学科を卒業されてより、大正十二年に鈴木煙洲先生が兼任の校長であられた県立商工実習学校教諭となられ、翌十三年に米英に私費留学され戻られて四年後、昭和四年九月に鈴木校長のもとで横浜高等工業学校教授になりました。昭和九年からは生徒主事も兼ねられ、これは終戦の頃まで概ね続けられましたと存じます。昭和二十四年、高工・高商・師範が校舎は離れた場所のままで統合した新制大学となり、先生は教授として横浜分校の担当となりましたが、工学部第二部の授業も受けもたれ、御自宅が大岡にありますことも重なり弘明寺地区工学部の構内を通じてご出勤、ご帰宅の感があ

りました。昭和三十七年三月、本学を定年でご退官になりましたが、その後本学の工業教員養成所、神奈川歯科大学、そして県立外語短大等とお勤めになり、その間工学部構内でご通勤途上のお元気なお姿に接し乍らの日々を過したことをよく覚えております。

先生の母上は長野県下伊那郡神^{くまし}稲村がご郷里とかがい、小生の母も天竜川の対岸の下伊那郡市田村が郷里、そして又先生は神中十四回（一九一四年）の卒業生で小生は四十回（一九四〇年）卒と、正に父と子の差乍ら小生が後輩であることも手伝って何とはなしに懐しくありました。

新制大学として各学部が分散して存在していた本学は、昭和四十年頃より一つのキャンパスに統合した大学として結束を固める文部省の方針が伝えられ、その後紆余曲折はありましたが保土ヶ谷のゴルフ場跡地に統合することが決定しました。政府の方針で当時の全学部の敷地建物等を売却し、その費用を新しいキャンパスに投入する閣議決定も一応なされました。しかしこの統合なるものは土地の買収、各学部の建設計画、移転それにその間に大学紛争もあったりオイルショックも重なったり、種々の予期せぬ出来事がありました。日を追うて一步一步進捗しました。先ず事務局、そして教育学部、経済学部、経営学部が順に移転し、遂に工学部は昭和五十四年八月に殿りとして移転統合を終えるスケジュールが定まりました。その数年前より研究・教育を従来通り行いながら、種々遺漏なく移転を行ってゆく工学部あげての毎日が続きました。

その最中もち上ったのが名教自然碑の今後のあり方でありました。詳細は『自由の翼』（昭和

六十一年八月二十九日菅要助発行、村松四郎編集）の一四〇頁に記載しましたが、学部内および
各同窓会の熱烈な議論の結果、漸く煙洲会により「学生の立場から考えて新キャンパスに移転す
べきであろう」と決定しました。昭和五十四年夏休みの八月、昭和十二年来略半世紀にわたって
弘陵のシンボルとして峻立していた名教自然の碑が業者の手により注意深く解体され移転の準備
が進む姿はわれわれにとって覚悟してはいても鉛を呑んだようなつらい感じでありました。まし
て極く近くにお住まいになり、常に弘明寺の工学部構内の名教自然碑の横を通って外出される竹
内先生からご覧になって身を切られるような心持あるいは無常感をお持ちになったことは想像に
難くないのであります。先生はその翌年九月に『寄席の息子と英文学』をご発刊になり、その
最後の方の章に「邯鄲^{かんたん}之夢」と書かれてありました。この語はあるいはこのような折にも考えら
れたのではないかと推察申し上げております。常盤台の地に来られ名教自然の碑が常盤台工学部
の中央に杜^もを背に厳然として工学部のシンボルとなっておりまことをごらいただいた瞬間、
先生にはある安堵感が視われました。これは私共にとり大変に嬉しいことであります。先生は
工学部の歴史を貫く大きな芯の一つであります。こいねがわくは、ご壮健で今日までと同様いつま
でもわれわれ後輩達を見守りご高導いただきたいと念願することしきりでございます。

英文学の授業

建築昭七年 田 辺 謙 輔

先生が横浜高等工業へ御赴任されたのは昭和四年九月であらうか、我々はその年の四月に入學して夏の休暇を終えた頃と記憶する。

一年生の英語は大西友太先生と水野先生の御担任で、大西先生はラスキンの片苦しい教科書を使って、味も素っ気もない授業、水野先生は流暢な英語で講義されるが、学生一人ずつにジョージとか、ハミルトン、又はアンダーソンなど英語の名前をつけた。よくぞ英国人名や米国人名があるものかなと、妙に感心したものだ、どうも私自身がハミルトンなどと呼ばれてみると、あまりよい気持にはなれなかった。そんな授業の数週間後、新米の竹内先生が、ディケンズの『二都物語』とか、ハーディの『テス』、コンラッドの海洋小説、さてはシェイクスピア、ワァーズワースといった英文学の話を、只今煙洲会で拝聴するような名調子で講義の間になされるのである。

元来横浜高工は名教自然を校是としたから、学生を縛らない自由な環境であつたが、工業学校はやはり工業学校で、学生の間には文学を語り、哲学を論ずる空気は乏しく、専ら技術指向であ

った。そんな雰囲氣にあきたらない私には、先生のかぐわしい講義は、乾いた土の中に滋雨が浸み入るように、青春の夢をみたしてくれたのであった。

語学の恩師と言えば、建築科だけにあったフランス語担当は、内藤濯先生で、この碩学の講義は実になめらかなフランス語で、目をつぶって聞いていると、その発音が実に美しく耳にこらがってくる。時としてシャンソンを歌い、モリエールの戯曲を語ったが、こうして英語、フランス語とも語学の授業は私にとってたのしい時間であった。

ついには弘明寺旧国大校舎の裏山にほど近い先生のお宅におうかがいしてお話を聞き、御馳走に預って、夜おそくまでお邪魔するようになった。近頃、先生宅をおうかがいした時は、その書斎はそのままになって居り、玄関からすぐ入れるのも昔の通りだ。もれ聞く琴の音は昔も今も同じ。ただ弾かれて居られるのは我々がもてなしを頂いた奥様でなくお嬢様であられる。

戦争の前後にかけて、私は母校建築科の講師をしていたが、半ば専任の如く勤労働員、さては野外演習、見学旅行にも教官として学生に随行した。先生はその頃教務主任で、学生の世話に御苦労をなされていた頃だが、時として御一緒になる事があり、秋の晴れた日、先生と共に演習地習志野の一本道を語りながら学生の引率者としてであったが、やはり恩師と昔の教え子になって同行した記憶がなつかしい。

人間教育を受けた私

造船昭七年 石井市次郎

竹内先生御執筆の『彗星日記』が煙洲会で刊行されるにあたり、私どもの拙文まで掲載することができるとは全くの僥倖であるので、敢て愚稿ながら寄稿させていただきます。

私が横浜高工を卒業してからはや五十五年の歳月が経ったのであるが、煙洲会等を通して今なお元氣な先生にお目にかかることができ、多大な御指導をいただけることは誠に感謝である。先生は既に卒寿を昨年越えられたのに壮者も及ばぬお元氣で、そのお話しなされること理路整然、拔群の記憶力をもって滔々としかも興味深く御発表なさり、拝聴する私も驚嘆してやまないところである。

昭和四年造船科一期生として入学しその年の九月より竹内先生を英語教官として迎え入れた。先生の英文学の講義は誠に迫力に満ち楽しく、いつの間にか聴く学生に感動を与え、深く心を揺すられたのであった。先生は英語会話を放課後に指導され、学校隣接の県立商工実習学校生徒も交えてYMCAのスネード先生や東京白金から伝道師ミス・ハッラー先生をお招きになり親しく外国人に接する機会を与えられ、学生が臆することなく外国人の前でその国の言葉を話

することができるようになったのはこの時からである。

私は三年生の時、航空専修生となり造船科を卒業し、その後航空機製作にたずさわリ、戦後調達庁職員となって、駐留米英軍に接し、飛行場拡張問題や航空機事故等で困難な交渉を交えたのであったが、外国軍人に気おくれすることなく任務を遂行できたのも学生時代の先生の御指導に依るものと思ひ感謝している。

私が馬車道通りの指路教会の門をくぐったのは一年生の秋頃であつた。同級生の屢々の誘いを拒み得ず訪ねたのであつた。私は自分自身を信じ、自分の力に頼つて努力することより他に自分の進む道はなく、イエスに頼れとのキリスト教のいわば他力本願的な考え方にはどうしても納得できず、教会につらなることは私の好まないことであつた。しかし私は友人に引張られて教会へ足を運んでしまつたのであつた。そこは日曜学校の高等科で、先生は東北帝大機械科卒業の方で、教室の隅で聖書講義を訝かり聞いている私を懇切に指導され、私の疑問としているところを解明して下さつた。私は二年生の四月、キリスト教でイエスの復活祭として記念する教会礼拝の時、この先生を教父として洗礼にあずかり教会員となつたのであつた。この洗礼のとき、はからずも竹内先生の奥様と一緒に受洗したのだった。それから教会からすすめられるままに教会の手伝いをするようになり、いつの間にか「日曜学校の先生」と子供たちに呼ばれるようになってしまつた。毎日曜日朝八時に家を出て九時からの日曜学校、終えて十時からの教会礼拝、その上、

月に一度は午後教師会、誠に多忙な日曜日であった。

しかし私はまだまだ忙しくなったのだった。それは、高工のまわりには教会を知らない多くの子供たちが群がっていたことであった。その子供たちにイエスを教えたかった。学友の同志と計り、竹内先生をお宅に訪ね、先生のお宅を今後毎日曜日午後開放して日曜学校を開かせていただきたいと逸る心を先生に申しあげたのだった。誠にあつかましい若者の勝手な願いであった。しかし先生や奥様は立ちどころに私たちの非常識とも思えた願いをお心よくお聴きとり下さったのであった。日曜学校は附近の子供たちにめずらしく、たちまちのうちに部屋いっぱいになってしまった。時間の前後、子供たちは大声ではしゃぐかと思うと野外と同様に暴れる者もあるという状態、それまで静かだった先生宅はその後お過しいただく場所をも失ってしまった次第であった。しかし先生や奥様は嬉々として喜ぶ子供たちを微笑さえお浮べになって見過ごされ、当惑する私ども学生を力づけるとともに屢々散財までなさって慰めて下さったのであった。そのため、私たち学生にとっては思うところを自由に語り論じ合う場所であり、子供たちにとっても楽園であった。本当によい子供たちであり、すくすくと成長していったのだった。私たちの行動に賛意を表わされ、共立女子神学校の学生も参加されるようになり、私ども高工卒業後も後輩が引き継ぎ活躍してくれたのだった。

私は卒業後も先生宅をお訪ねし、先生の御指導をいただき、遂には結婚の御媒酌もいただくと

いう御高配に預ったのだった。どこまでも御心配をかける学生であった。

私の非常に残念であったことは、昭和五十年一月、先生の奥様が急逝なされたことであった。あのお元気で朗らかであられた奥様が一回のお休みもなく突如御他界なされたのだった。奥様の御親切に甘えて学生時代からどんなにかお世話をおかけしたことか、その都度やさしくお言葉をいただき、力づけて下さったのに、何のお礼を申しあげる時なく過した自分を恥じ、御霊前に首を深くたれお詫びするより他なかった。平和だったお家が突如として悲嘆のどん底に閉じ込められたのだった。先生やお子様方のお悲しみは察するに余りあるものであった。

私は先生を通して、御家庭を通して誠に多くのものを与えられた。母校に入学し、そこで英語教官としてお会いしたのであるのに人生の指導者として接して下さったのである。過去の因習を引き摺りながら頑なにその中に生きることが人の道であると思っていた私に、大らかに緩められた心をもって、生きるその時々を理解し、それを受け入れてゆく生活の喜びを与えていただいたのは先生からであった。煙洲先生を通して、竹内先生を通して私の生活も徐々に緩められてきたのを感じ有難く思っている次第である。

それにしても、今の青少年は可哀相である。生れるや緊張した家庭におかれ、幼くして塾に入られ、有名校入学を目当てとされて自分の能力の如何にかかわらず知識を頭におし詰められる。有名校を卒業すれば有名会社に就職でき、将来を約束され贅沢な生活ができ平穩な生活ができる

と思うからである。しかし確かにそうであらうか、数人は或はそのように希望をものにするかも知れない。心を忘れた智的発展で本当の喜びを期待することができないことは明白な事実である。今や至るところの自然は破壊され、南極の地下資源まで採掘されようとしている。人間と太古の昔より共存共栄してきた禽獣類までが人間の奢侈欲望のために絶滅しようとしている。曾て私どもは自然淘汰という言葉をよく耳にしたものであるが、最近では聞くことはとんとない。総てが人意淘汰となってしまうのである。世界繁栄とか高度成長とかの美名のもとに物的欲求にあまりにもとらわれ利己主義となり、隣りを忘れた暴走を続けているのである。パベルの塔の譬は決して古言ではない。青少年問題が学校や両親の問題であると思う前にもう一度、私たちの問題であることを思いたい。私どもの力は今の社会構造や、その動きの大エネルギーの前には何の通用もしないものであるかも知れない。でも声を大きくして叫ぶことはできるのである。煙洲先生、竹内先生より教えられた名教自然の意をはっきりと身に受けて、それを行ずるようになる。いいものである。

竹内先生と私

造船昭七年 石川久能

明治四十三年五月、竹内先生は横浜伊勢佐木町の御宅からハレー彗星を御覧になってから七十六年目の昨年三月、御家族と共にオーストラリアにて第三十回目と云われる地球接近の姿を御覧になりました。

ハレー彗星を生涯に二度見る幸は、健康を維持されて来られたお若い頃からの身心共の並々ならぬ御精進の賜と存じ、常々私共の御尊敬申上げる所であります。本年四月には九十一歳の誕生日を迎えられますことを謹んで御祝い申上げる次第でございます。

今頃ハレー彗星は、一年後に土星の軌道を横切る所で観測されているとの事です。第三十一回目の地球接近は、二〇六一年七月二十五日と計算されている由ですが、今年十二歳になる私の最年少の孫が八十六歳頃に再会出来る事になり、先生の御健康にあやかっ生涯に二度見る事を得られるようにと、先年竹内先生より頂いた濠州の御土産を五人の孫達に頒け与え健康の大切さを教えております。

星占いではありませんが、ハレー彗星が第二十九回目に地球に接近した年の翌年に私は生れま

したので奇しくも第三十回目接近の日より今日の昭和六十二年三月もまた、一年後と数えられます。長寿の先生にあやかたたく、思いめぐらしますと、私は先生のお生れより十五年後先生と同じく横浜で生れ、中村町で育ちました。そして第二日枝小学校、商工実習、高工と進みまして、八年間を鈴木校長の下、竹内先生や先生の親友であられた森泰吉先生より少年期の教えを受けてまいりました。竹内先生には実に大正十三年以来の御薫陶を頂いた者でございます。今日にも杖もひかず、きりりとした背をのびし矍鑠として外出され、お話するお声の大きい事、陸軍予備将校の昔も偲べれます。そして先生の健康に対する御精進は昨日今日の事ではなく、私共の真似の出来ないお若い頃からの鍛練の賜かと常々尊敬致しております。歩くこと、よくたべること、よく眠ること、よく書くことがあのすばらしい御記憶の豊富な事の源かと常々仄聞する所であります。又御手紙を頂戴致しますと、御叮嚀な毛筆で御真情のこもった御返事のまたお早い事、その謹厳誠実なお心ざしも長年の御心の鍛練によるものと常々尊敬申上げ、有難く存じております。私は老人の域に入りまして人に嫌われる昔話が多くなりますが、お許しを願って思ひ出の二、三を書かせて頂き度く存じます。

大正十三年四月、関東大地震の翌年の事、震災で焼けた後のブラック校舎に十三歳の少年等が拝した竹内先生は、その頃海外留学を終えられて、きりりとした洋服姿は誠に御立派で、他の諸先生とは格段のちがいでその厳格さも加えて、私共工業部の悪童どもは近寄り難く、おそれてお

りました。

先生が商業部の生徒に授業されておられるのも知らず、その隣室でさわいでいると、あの大きな御声で御叱りを受けふるえ上ったことでした。御叱りも大きな声の英語でした。誠に厳格な先生の印象は卒業後は何と友達のようにやさしい先生となれました。当時の恩師の諸先生は鈴木校長の御指導によるものか、学業以外に家庭のこと、運動のこと、などを通じ親密な各種にわたる課外の御指導をして下さいました。そんな時担任の森泰吉先生を「モジャサン」とし、竹内先生は「ユーシアマン」と陰で申上げて来ました。

「トンカチ」「ぎやさん」「福助」「お和尚さん」「とらさん」「らんちゃん」「かっぱ」「うさぎ」「おめが」「シャケ」等々の諸先生の中に「ユーシアマン」と申上げた少年の日の思いにふれます。

×

×

×

竹内先生と野球については、既に先生の御本のなかに詳しく記されておる所ですが、ある日黒板に誰かが本校対Y校と書き応援を求めた表示を御覧になった先生は、いきなりかけよって白塁で大きな点を書き込まれました。あとでお聞きしたら本校の本の字に点がぬけていたからと申され、その細かい気くばりに感じ入りましたことがあります。

又先年は商工実習が甲子園に出場した時の主将高橋猛夫君の遺児で高橋俊之君（商工・化32）に

当時の様子を語られました由、記憶力もさる事乍ら先生の野球にかけた熱情をも思い出されます。高橋猛夫君は私と同期で昭和十九年に戦死されたのでした。

×

×

×

竹内先生にあやかりたく思いめぐらすなかに、「久能」という先生の御住所の地名を知りました。読みこそちがいますが私の親は家の前のお寺さんから教えて貰ったと云っていたと姉から聞いた事があります。昔の伊勢佐木町通りは小学校へあがる前大正五、六年の頃は良く父に連れられて、今の馬車道附近の六道の辻までの往復に通いましたが、先生の新富亭は御本によりはじめを知りました。上の姉は良く知っていました。花見せんべいや亀楽せんべいは覚えておりますが、今日昔の横浜を思い出すには余りに変化しすぎる思いです。もし往時の横浜を面影に浮べるとすれば、三溪園か外人墓地の一部位ではないかと思われます。最近桜木町駅附近も開発の計画がある由ですが、私の生家の附近から中村川にかけても山容まで変り、往時の面影を想像することも出来なくなりました。その点、吉田橋からの伊勢佐木町通りは昔の場所に残っており、昭和六年でしたか、対高商野球定期戦が復活した頃、試合に負けて泣き乍ら涙を流して通った頃を思い出され、竹内先生の伊勢佐木町通りの思いとは違っているかと思ひます。

×

×

×

次にはSの園日曜学校の頃の思い出になります。在学中、YTC・YMCAのメンバーが先生

の御宅を開放させて頂いて日曜学校を開いていた頃、私は指路教会に属し毛利官治牧師より受洗致しまして教会の方の日曜学校に行つて、Sの園日曜学校とは全然無関係でありましたが、偶々講堂でクリスマスをするため、学校からの補助金を煙洲先生の御宅へ御願いに参りまして金五円也をいただきました。当時の水田正人君の日記には昭和六年十一月十八日（水）と書いてあり、石井市次郎君と三人で御願いに上りました。その時校長の云われました事は「一つはクリスト者は自分のみ救われたと思い、いたずらに未信者未信者と云つて、彼等は救われざる可哀相な奴だと思つている。これがいけない」と云われた事が記されてありました。

当時のSの園日曜学校の教師は、私の知る所では早逝した前記水田正人君（機10）、中山顯世君（機10）、河村鋼男君（造2）を除いて吉川時哉君（機10）、石井市次郎、多田正文、山田実（いずれも造1）君でつい先年より竹内先生を囲んで、当時生徒であられた恵美子さんも加わつての会合を持つようになりました。私はこれを秀竹会として楽しみにしております。

×

×

×

偶々YTC・YMCAの事が思い出されました。その中で竹内先生の指導されていた英語会にミス・ハツラー先生が、上條勉先生（機3）の御紹介でバイブル・クラスを開くことになりました。偶々英語会のメンバーとYMCAのメンバーは同人メンバーでしたので、二つのグループが一緒になつて聖書を学びました。

竹内先生を通じてこのハツラー先生には、戦前戦中戦後を通じ、上條先生や私をマイボーイと呼んで屢々御手紙を頂いて来ました。

ミス・ハツラー先生は「手紙を書くこと」をモットーとされ、私はたくさんさんの御手紙を頂きました。竹内先生に通ずるものがあると私は今に思っております。ハツラー先生は私の生れた明治四十四年横浜に上陸、以来日本のためにつくされました。当時では珍らしい勲四等の叙勲も受けられ、今でも多くの名士が尊敬しています。我々同志の吉川時哉君もその一人であると思います。現在も大阪府八尾にハツラー記念教会が残されております。

ハツラー先生は既に昇天されて十年を数えますが、昭和四十四年ロスアンゼルス郊外アナハイムに余生を送られていたハツラー先生を偶々私の娘が新婚旅行の途おたずねして、マイボーイの娘が遠く日本より訪ねてくれたと大変な歓迎を受けたと云う私の喜びも附記させて頂きます。

×

×

×

煙洲先生の云われた「人を植うるには百年の計」に思いを致します。竹内先生がお宅の庭から移されたヒマラヤ杉（先生はあえてレバノンの香柏と呼ばれています）が、大岡の旧商工実習、旧高工のある地に今日も亭々として聳えております。そのはじめ煙洲先生が学校の裏の若宮神社の境内から移されたと云う桜、榊、そして公孫樹から、お茶の木まで植えられたお話も承っておりますが、度々の災害で今は何代目かの桜と公孫樹と竹内先生の寄贈されたヒマラヤ杉が見られ

ます。その亭々と聳ゆるヒマラヤ杉への私の思いを書き添えさせて頂きます。私は造船科に学び航空専修の一期生として航空機々体方面に職を得ました。往時の航空機用木材としてのシーダが重用されたのはその均質性と大木になる事でした。重要な構造部分である桁や合板に用いられて印象の深いものがあります。この樹は聖書（列王Ⅰ 4 33）等に表示されたレバノンの香柏で、昔から大木となり神の樹と云われ、高貴、莊大、美力、威嚴のシンボルとされて来ました。樹木の王者として香柏を讃美する言葉が聖書の諸所に見受けられます。十年の計は樹を植うるにありとの諺以上にもう何十年と大岡の地に聳えています。竹内先生はこれをオスカー・ワイルドの傑作『サロメ』の中で予言者ヨハネがサロメに説く言葉として「そなたの緑の黒髪はあのレバノンの森のように」と美しく印象づけて下さいました。私は近くの新宿御苑の正門のそばに美しいレバノンの香柏を見て先生を思います。

×

×

×

さて竹内先生の彗星綺談への御礼に星との出会いについて記させて頂きます。

仰ぎ見る星万年の光かな 秀雄

と署名された野尻抱影著の『星の神話』の御本を頂いたのは六〇年の四月の煙洲会の帰りでした。著者は神中、早大文学部出身の竹内先生の先輩であられました。その御本の中で南十字星のことが今に印象深く思い出されました。

昭和十七年二月一日の事、対米戦争での米海軍の最初の反撃がマーシャル群島の基地に向けられました。その爆撃のものとすごさは想像以上のものでした。当時基地には砲台は出来ていました。が砲弾が着いてない頃でして、無抵抗のまま徹底的にすべての施設から燃料のすべてを消失、破壊されてしまいました。

私共は九死に一生を得ました。その頃、灯火管制された南洋の空は内地の数倍もの明るさで満天の星光りは新聞の大見出しがよめる程でした。此所は北緯八度の太平洋上の環礁で、満潮になるといくつかの島が水没するような所でした。内地の子供の時間が丁度現地の消灯時間でした。屋井三号乾電池の重たい点検灯を持って僅かに残された椰子の林を通り抜けると、椰子の葉影に十字架を少しかしげた様に妖しく光る南十字星が見えました。そのときそばのドラム缶がボコンボコンと急に鳴り出しまして私は倒れんばかり飛び上って身構えました。南十字星のこわざでした。あとで空ドラム缶が夜の冷気でわずかの空気の動きで凹むことを知らされました。勿論先日埋葬した人達の土盛りも注意しました。そんな時何か星に祈りたい気になりました。

内地は真冬の最中、母は朝早くおきて一人家から一軒はなれた八幡様へ私の無事を毎日祈願しているとの姉の手紙に泣かされました。

無関係であった星が私を見守っていてくれて、母に通ずるように思いました。その後、商船学校出の主計大尉から星の話を聞くことが出来ました。六分儀の検定に空の大三角を利用する話な

ど聞き乍ら、いまに頭上に輝やくプロキオン、ペテルギウス、シリウスと云われた一等星を教えられました。それまで北斗七星、北極星、オリオン、カシオペア位しか知りませんでした。それが私の天文知識の全部でありました。昭和五十六年でしたか、昭和七年卒の同期生が五科の会を綜合して七年会を結成し、共同で五十年誌を作ることになりました。その時竹内先生や建築科の伊藤三郎先生からハレー彗星を二度見る長寿の幸運の事をお聞きました。そしてその幸運は永年の自らの精進と日頃の鍛練の賜であって精神的な努力の結果神様から与えられるものと思いました。そして孫達へこれを伝えたいと生れてはじめて天文学の講習に出席しました。皆これ竹内先生のハレー彗星に教えられたものと思っております。そんなわけで私は六十一年一月十二日東京で午後六時頃南西の空十五度位の高さにあるフォーマルハウトという五等星の左の方、みずがめ座の中にそれらしい星を肉眼で見ました。望遠鏡では判別出来ず、一々電話で聞き乍らの事でした。

地球の一千億分の一しかないこの彗星が五十時間の自転をしている事が報じられました。あの尾（彗・髪の毛、コメット）の中にもう一つの彗星が生れているとか、そのチリと水蒸気の中に生命の起源が発見されるかも知れないとの新聞記事を読みました。私の星への知識はそんな所で、竹内先生のお話について行くのがやつの事でしたことをここに附記してお許しを得たいと存じます。

又、竹内先生の御健康を祈り乍ら、物理学で聞いたニュートンの晩年と異なり、そのニュートンの万有引力の法則を適用して太陽を焦点とした橢円軌道を運行し、今に現われると予言して一七四二年八十六歳で逝ったグリニチ天文台二代目台長エドモンド・ハレーの誠実が偲ばれます。死後十七年目にその予言通り彗星が現れたので誰云うとなくハレー彗星とよばれるようになったことも附記致します。

×

×

×

終りに先生より頂いた句を一部記して竹内先生の御心の程を拝察致したいと存じます。

仰ぎ見る星万年の光りかな

上よりの恵みと師恩米寿かな

名曲を聞いて偲ぶは母の愛

忘るまじまごころこそは父の恩

天と地と恵みの愛に生きる新春

四海波静かに春は巡り来ぬ

わぎもこを偲ぶ琴の音春の朝

うつしよに生きる幸あり地の塩に

生き死は神に委ねて暮鳴けり

河原灼け無類の無為の石のこえ

叫ぶ声自然に帰れ秋の声

明月や雲にかくれて物思ひ

冬ざれば野毛も賑ふ都橋

不死鳥と恩師を偲ぶ煙洲会

すみ渡る空に真情映りけり

真心の贈り物にて仰ぐ空

玉章も積れば老の宝かな

海と船中華の香り浜自慢

私にとっての竹内先生

造船昭七年 山田 実

私にとっての竹内先生は英語の教授であつたばかりでなく、私の人生に色々のことを教えて下さった先生です。

英語の講義の中にも先生の英文学に対する深い御研究の片鱗を思わせる節々が度々出て来て、私如き技術屋を志す者にとって人生はそれだけではいけないと言うことをどれだけ教えられたかわかりません。

当時クラブ活動のため水曜日は授業時間が短くなっていて、各自運動の練習を初め各種のクラブ活動に励んでいたが、私はYMCAの会合に出ていました。ここでは毎度横浜山下町の共立女子神学校の副校長堀内先生や、米宣教師ハッラー先生が来られて聖書の講義が行われて居りましたが、いつの頃から学校周囲の子供達を集めて日曜学校を開いてはどうかとの話が出て、真剣に具体策を考えることとなりました。ところが学校裏手にお住いの竹内先生がこの日曜学校の為に御家庭を開放して下さることとなり、又そのためオルガン迄購入して下さいました。このことは今にして思えば竹内先生としては大変な決心、判断によるもので、その大きな犠牲を承知でお引受けになったことで、私共はまだ世間知らずの学生でしたから、この先生の御好意を甘んじてお受けし、数名が指導者となって一生懸命尽しました。私共が卒業後もYMCA会員の後輩が引継いでやってくれました。私は卒業後勤め先の関係で竹内先生のお宅即ち日曜学校を訪問することは殆ど出来ませんでした。ここでどうしても大書しておかねばならぬことは、この日曜学校が機会となり、竹内先生御一家がキリスト教に入れ、海岸教会の会員になられたことです。当時まだ小学校二年であった竹内先生の御長女の恵美子さんは、現在海岸教会の長老となられ、教会に

はなくてはならぬ重要な人となって居られることで、当時の先生の決断、御決心が先生御一家にとつては大きな生活の目標を掴まれたわけで、このことは私共の学ばねばならぬ大きなことであったと思います。

真黒な頭髪をオールバックにして張り切った頑丈な体格の往時の竹内先生も、今日は御老齡の為体格は優しくなりましたが、これほど思うことに対する決断実行の強い精神は、今日も尚昔と変わらず、優しくなれたとは雖も、その体の中に持つて居られることと信じてやみません。いつも笑顔で平和な顔の先生であり、その内容は各方面に幅広い御研究、広い趣味を持つて居られ、且つ心の底には非常に強い決断力を秘めて居られる竹内先生には、平素私淑しているとは雖も、到底そのスケールには及び得ないものを感じます。

いつまでも御壮健を祈ります。



田 辺 謙 輔 画

竹内先生と青い表紙の本

建築昭八年 林 久満

白い吸取紙に、インクがじゅっと染み込んで行くように、少年期から青年期にかけてのある時期には、英語の単語、数学の公式、歴史の年代などが、まだ純真で柔軟な頭脳に、しっかりと染み込んで、何十年かたった後にもなお、確かな記憶となって頭の中に残っていることがあるものである。だがこれは、ごく限られた時期にのみあり得ることで、おおかたの記憶というものは、時の流れとともに、急速に消えて行くものらしい。

しかし、多くの消え去った記憶の中にも、まるで冬の柿の木の枝に、一枚の葉が、やっと残って、風に揺れているような記憶があるものである。何故、なんでもない、こんなことだけが、数多くの出来事の中から、記憶として残ったのだらうかと、当人もいぶかるような記憶である。子供のおもちゃ箱の中のビー玉や石ころが、子供にとってはとても大切な宝物であるように、この記憶にも何か残るだけの訳があつてのことと思うが、後になってどんなに考えてみても、何故かその理由が思い当たらないものである。その上この断片的な記憶は、時たま頭に浮かんだり、消えたりしているうちに、段々純化され、美化されて、大切なもののように、いつか頭の片すみに

しまいこまれ、果てはこの思い出が、壊れてしまうことを恐れて、現実と向き合うことを、避けようとまでするようになるのである。今はすっかり変わり果てた故里の、少年時代の懐かしい思い出、若き日の初恋の少女の思い出などにも、どこか似かよった所のある、こんな小さなビー玉の様な思い出の一つ、二つを、誰もが持っているのではないだろうか、私は子供のように、このような思い出を大切にしていた。我々はみな、それぞれの大小様々な思い出を胸に抱いて、時には思い出だけを頼りに、年老いてゆくのだろう。私には竹内先生とのあいだに、青い色の本の思い出がある。

京都の中学から、横浜に出てきて、高工の生徒になった。既に受験の時に承知していて、覚悟はしていたけれども、あの頃の校舎は、関東大震災後の応急校舎のままだったので、全部がバラックの平屋で、まことにお粗末な建物であった。工学部五十年史には、このことを「当時校舎の荒廃の様子は全国一と称された」と書かれているほどの建物であった。この新生入生は、古いが整然としていた中学の校舎と違い比べて、かなりショックであり、淋しくもあり、しばらくは仲々校舎に親しみが持てなかった。

しかし、全校生徒から父のように慕われていた、校長先生のお部屋も、大勢の優秀な先生がたの研究室も、生徒達の教室、製図室、実験室も、どの部屋も全部例外なく徹底してバラックであ

った。だから建物はバラックでも、建物の中は多くの人材が満ち溢れていたバラック、学問と技術の殿堂のバラックでもあったと思う。そして又バラックの講堂には、ベヒシュタインのピアノもあって、下駄ばきで騒々しい聴衆の前で、しばしばピアノが弾かれたものである。音楽会なんて言える雰囲気の前でなくて、演奏者には大変失礼だったが、演奏者も、目的はベヒシュタインが弾きたくて、出演してくださったのだろうと、今も思っている。なにしろ、当時は日本でもまだ数少ない名器が、バラックの中にあつたのだから。バラックとベヒシュタイン、まことに奇妙な取り合わせだけれど、バラックの中は、実に充実していたんだという、これも一つの事実ではないだろうか。だから徐々に私も、容器よりも中身が大切なんだ、問題は内容なんだと考えるようになっていった。

そしてある日、学校の裏山に登ってみたら、下町を隔てて遙か向こうの丘の上に、白く輝く堂々たる建物が見えた。“あれが高商だな”と友人が言った。兩人しばらく白い建物を見詰めて無言。やがて細い山道をかけおりて、スポーツに熱中する学友達の群れに加わった。校庭には若さが溢れていた。そして潑刺たる空気が漲り、生徒は極めて誇り高く、意気軒昂であった。私はバラックになじみ、学校に慣れ、学校全体が好きになり、学校の中にすっかり溶けこんで行くことが出来るようになっていった。

さて、バラックの中の先生がたには、個性のきわだった方が何人もみえて、私が直接教えを受

けた先生の中にも、まず煙洲先生と中村順平先生、そしてフランス語の内藤先生、数学の渡辺先生、英語と倫理の大西先生、その他多くの先生がいられたが、私が早くから親しみを感じたのは、煙洲先生、竹内先生と数学の野村先生だった。ただ大西先生には仲々近づきがたくて、やっと助手時代になって、少しは先生を理解させて戴いたような気がしている。

竹内先生は、生粋の浜っ子で、その洒脱なお人柄のためと、当時商工実習でも教えてられたせいか、中学を出たばかりの私には、先生の回りに、何か親しみやすい空気があり、講義も亦理解しやすかったように思った。しかし何より私が嬉しかったのは、ブルフィンチの『ギリシャ・ローマ神話』を原書で講義して戴いたことである。西欧の建築をはじめ、美術や詩などを学ぶ者にとっては、必ずこの神話の知識が必要であって、建築の勉強の途中でも、度々ジュピター、アポロやダイアナなどの神々の名や、アテネ、トロイなどの地名にお目にかかることになる。そして、今は宗教から全く離れてしまったこの神様たちの話は、我々人間と同じように恋をしたり、嫉妬したり、騙したり、隠したり、中には横着で行儀の悪い神様がいたり、おおらかさと激しさが入り交じった、まことに興味のある物語でもあるのである。

実は、この本には当時既に、岩波文庫で野上弥生子の名訳『ギリシャ・ローマ神話』が出版されていて、生徒は有隣堂でこの文庫本を手に入れていた。だから先生から和訳を指名されても、級友達はすらすらと同じ名訳をやったのけたものである。無論先生はこのことを良くご存知だっ

たと思う。要は建築家を志す者の教養として、生徒達が神話に興味を持ち、親しみ、進んで勉強するようになればとのお考えだったと思うが、あの頃の教室は、なんともおおらかで楽しかったし、みんなが伸び伸びしていたものだ。それにしても先生が建築科の生徒達のために、この本を選んで下さったことは、とても有り難いことだった。この本のおかげで、私は楽しみながら神話を学ぶことが出来て、その後建築家として生きて行くためにも、随分役にたったと思う。又家庭でも私は三人の娘達に、よく行儀の良い神様の方の話だけをしてやったことを覚えている。

この本はまた実に美しい小型の本で、表紙の明るいブルーの色に、何とも言えない気品があり、文字の金色ともよく調和して、手に持っているだけで楽しい、私のお気に入りの本であった。いつも書棚に、この本と岩波文庫が並んでいたのに、惜いことに戦災にあって無くなってしまった。いま手元には、その後手にいれた、今は古色蒼然たる岩波文庫本のみがある。それも昭和二十八年発行の改訳本で、ただ訳文だけが印刷されていて、著者の紹介も、「あとがき」も、原書の書名、発行所も記載がない。丸善あたりに行けば、再び手に入れることが出来るかも知れぬが、私は青い本の思い出を大切にしたいので、そのままに過ごして来てしまった。私の欲しいのは失ったあの一冊で、新しい本にはなんの魅力もない。だからこの青い本は、私にとっては、今は幻の本、また我が青春時代のシンボルのようなものでもある。その後どこかで偶然、イギリス紅茶の缶の蓋を見付けてきた。青いプラスチック製で、金色の文字と王冠が彫られていて、無くした

本のイメージにぴったりである。この蓋、いま我が愛機ワープロのそばに置かれて、時々私を青春時代に呼びもどしてくれるのである。

私には若いときから、身近な方の印象を、色彩と結びつけてみる妙な癖があつて……煙洲先生は渋い茶色、中村先生は黒と白といふし銀、体操の本間先生は明るいオレンジ色に赤い円一つ、当然竹内先生は青と金という具合である。もし私が画家であつて、先生の肖像画をお描きするとすれば、先生の背景には青い明るい海と、その上空にハレーすい星を、金色で描くだろうと思う。したがつてまた私には、先生の歩いて来られた道も、青色と金色に輝く、明るい一本の道であつたようにも思えてならない。

先生は又歌舞伎が大変好きである。中村順平先生もまたとても好きで、建築学の講義の中に、歌舞伎のお話がよく出てきたものである。かつて私は両先生に対談をやっていたらと、考えたことがある。英文学の先生と、フランスで学ばれた先生の歌舞伎のお話は、青と金に白、黒、いふし銀が交錯して、絢爛たるお話の綴帳が織りあがつたのに。今はせんないこと、まことに残念でならない。

先生はやがて九十一歳になられる。その先生が、かつてお話の途中で、元総理の小平さんや、鈴木さんのように、「あー」だの「うー」だのを、乱発されるのを耳にしたことがない。このことは先生が抜群な記憶力を持たれ、言わんとされることが、頭の中に整然と構成されているから

だと思う。二、三年前、私がご紹介して横浜ロータリークラブと三水会（高工、高商卒業生有志の月例会）で、先生に卓話をお願いしたことがある。いずれも内容のある楽しいお話で、大変好評であったが、最初から最後まで全くメモ無しで一気にお話しになった。一同感嘆、お年を伺って驚嘆、信じられない、と言われたことがある。先生のおつむは、未だに少年時代や青年時代の様な柔軟性が、保たれているのではないだろうか。そして先生は今、楽しかったこと、苦しかったこと、豊かな数々の思い出に包まれ支えられて、静かな朝夕を過ごしていられるのではないだろうか。

煙洲会のおかげで、私は今もなお二人の恩師から、教えを戴いているのだと思う。煙洲先生は会場のお写真から無言の教えを、矍鑠たる竹内先生からは親しくお話を伺ったり、お目にかかれることだけで。

かつて竹内先生は、私達にとっては英語の先生であられたが、今は、いかに老いるか、老いはいかに生きるかを、身を以て示してくださる人生の師でもあられる。

竹内先生、何卒益々ご健勝であられることを、心からお祈り申し上げます。そしてこれからも度々、煙洲会にお越し下さって、我々にお話を伺わせてください。それから建築科の卒業生の中に、熱烈な心酔者が大勢います先生の恩師会津八一先生のお話を、今年は是非お聞かせください。

ますようお願い申し上げます。

(62・2・2)

竹内先生と私

造船昭八年 吉澤 幸雄

竹内先生に私が初めてお会いしたのは、昭和五年の横浜高工造船科の入学試験の時でありました。

入学試験は口頭試問だけで、筆記試験が無いとの評判につられて、入学願書を出したところ、試験当日になって、一般の口頭試問のほかに、英語、物理および数学の三課目については、試験官の先生と面と向って、一対一で試験が行われることが試験場に入ってから分かり、試験勉強をほとんどしていなかった私は、予想がすっかりはずれてしまった。

それで、この試験は駄目だと諦めの気持になったが、やれる限りの努力をして見ようと心に決めた。

最初の試験は、私のもっとも苦手の英語であった。試験官はきわめて紳士的な態度で、穏やかな口調で一冊の英語の本を取り上げて開き、その一頁を読むように指示された。

私はいわれたとおり、その一頁を読んだ。先生は終りまで黙って聞いてから、一、二の単語の発音について、再度発音するように求められたので、発音し直して読み方は終った。

つぎは、その文章の和訳であった。知らない単語が数個あったが、それは英語のままで良いと先生から許可をとって和訳は終ったが、このときも、先生から二、三個所の訳について質問を受けて、それがヒントになって正しい答をすることができた。

更に、先生は私に「英会話はやりましたか」と質問された。中学校では、まったく英会話をやらなかったことを、正直に申上げると、先生は「それでは、これで結構です」と労るようにいわれて、英語の試験は終ったが、試験中の先生の受験生に対する労りの態度に、私の心はすっかり平静になって、つづく物理と数学の試験を落ち着いた気持ちで受けることができた。しかし、この風変りな入学試験に合格できる自信は全くなかった。

合格発表の日に、電化を受験した親友と二人で、東京から学校に見に行った。その友人が予想に反して不合格となり、諦めていた私が合格していたのには、友人に対する同情と自分の嬉しさが交錯して複雑な気持だった。

東京に帰る車内で、自分が合格できた大きな原因は、英語の試験官である先生が受験生の心を静めるように紳士的で温厚な態度をとって下さった事が、私に非常に大きな力になったのだと確信した。

三年間の在学中は、先生とは個人的の交際はなく、校庭で行きずりの挨拶に、いつも先生が丁寧に答礼されるのには恐縮した。

卒業後、私は逓信省の船舶検査官になって英語とは縁が切れ、戦時中に鉄道省に出向になって連絡船建造に専念した関係で、これまた英語に縁がなかった。

終戦後は、役所の命令で四年間も、総司令部や第八軍との間の鉄道連絡船に関する渉外を一人でやらされ、非常に英語に苦勞させられ、特に、英会話には骨を折りました。

占領が終って日本が独立してからは、米軍との直接交渉がなくなり、また英語に縁のない仕事に戻ってしまった。

国鉄を卒業してからは民間会社に移じて再び、英語に縁ができたが、占領時代に覚えた英語が役に立って八年間を無事過した。

昭和六十年の暮から煙洲会に出席させていただくようになって、竹内先生と再びお会いして、お話を伺う機会に恵まれました。

昭和六十年夏に私が煙洲会で拓本の話をしてから、先生の早大時代の恩師である会津八一氏の拓本のことや、ハレー彗星の写真のことなどで先生のお宅で、お話を拝聴しましたが、先生の巧みな話術と博覧強記には全く感嘆させられるばかりでした。

どうか、いつまでも、御壮健でありますように、心からお祈りいたします。

竹内先生の思い出

造船昭八年 齊木雅夫

遠い昔の話、昭和五年度の横浜高工造船工学科の入学試験。川原先生、池内先生そして竹内先生が全国唯一の口頭試問による試験場で面接した先生の中でとても印象に残っていた。勿論入学後諸先生のお名前が解ったことだが……。英語の口頭試問試験官が竹内先生であった事は入学後の始めての英語の授業に現れた先生の姿を拝見した時であった。

教材もディッケンズ作の『オリバー・ツイスト』だったと記憶している。中学時代と全然違う教え方、話し方、発音の素晴らしさに只々驚く許りであった。入学後の下宿が先生の大岡のお宅の傍であったことも暫くして分った。私の入部したラグビー部の部長は大木波之輔教官であったが竹内先生は籠球部の部長だった。在学中は授業の外にE・S・Sで耳から覚える英語を教えて頂いたに過ぎなかったが、高工を卒業後どれ程役立った事か、お礼の申し様もない。誠に感謝の念で一杯である。

私から見えて一方交通の竹内先生とのおつき合いであったが、その後は煙洲会で時々拝聴する卓話は、昔と変らぬ若々しいお声と巧みな弁舌に感謝している私であります。

忘れもしない昭和五十八年三月二十三日の煙洲会の席上で、造船二期生の卒業五十周年記念の『思い出』と題した小冊子を会員一同に御披露した際に、思いも掛けない先生から称賛のお言葉を頂戴、村松幹事から希望者に配布すべく五十冊の追加作成の依頼を受け、完成した一冊を先生に贈呈した所左記の様なお賞めの御書簡を頂戴した。只一人の教え子である私個人に対するには身にあまる光栄に感じた内容の御書簡であった。

拝復

横浜高工造船工学科卒業五十周年記念「思い出」、芝中学卒業五十周年記念文集、並びに Gesco News を御寄贈頂き、真に有難う御座いました。

茲に心から御礼申し上げます。

貴君の横浜高工時代の「思い出」は小生に青春を甦らせる特效薬となりました。

また、芝中学卒業五十年記念文集中、貴君の「とづくに」飛び歩る記は早速読ませて頂きました。青雲の志を抱いて雄飛する日本青年を代表するような名文ですね。自分の感情を直接ぶっつける文章には生気が溢れています。よく写実的と云いますが、たとえば、カラーフィルムで撮っても、写真は写真です。寧ろ、文章の中には、その人の感情が自然と吐露され、湧き上がる処に心の籠った生きた文章があるように思います。

とかく、小生などは作文しようとして常に失敗しています。悪文と思われる作家の中に、案外読者の心の琴線にふれる文章を書く人が稀にあります。沙翁の如き天才は別です。

中学時代に、高山樗牛の「文は人なり」という言葉を讀んだ記憶がありますが、あれは、「The style is the man」という諺に由来するものでしょう。小生が横浜国大の学芸学部教授時代に、中学教員のための夏季講習の講師を頼まれて、この「スタイル」をテーマに講義をしたことがあります。

真の写真はカメラのレンズを通してよりも、心情のレンズを通して観察したものだと思います。その意味で貴君の「とづくに」飛び歩く記は、興味深く読ませて頂きました。この紀行文は寧ろ煙洲会あたりで「講演」として拝聴出来たら一層良いだろうと愚考致します。

いずれにしても、この度の御親切な御寄贈により、貴君の御人柄をより良く知り御活躍のフィールドについて、多少知ることの出来たことは望外の幸でした。玆に改めて御礼申し上げます。

尚、名古屋の河村君の近況を御報告頂き、有難う御座いました。同君の御快癒を心からお祈りしております。

末筆ながら、呉々も御自愛第一に……

敬具

三月卅一日

竹内 秀雄

齊木雅夫様

更に昭和五十九年八月発刊した『横浜高等工業ラグビー史、創立六十周年記念誌』を贈呈しましたが、その際にもご鄭重なご返事を左記の通り頂戴致しました。

残暑御見舞

本日はご鄭重にも横浜高等工業ラグビー史、創立六十周年記念の貴重な文献をご惠贈頂き忝なく存じます。茲に心からお礼申し、貴君の献身のご努力に対し敬意を表します。

呉々も御自愛專一に……

この度の記念号は正に盛り沢山の御馳走、しかも小生にとっては美味のものばかりで、ゆっくりオードゥヴルを頂戴してから、賞味致し度いと存じます。つまり、チーフ・スチュワードたる貴君の腕の冴えを拝見させて頂きます。

名簿を一寸見ただけでも郷愁を感じます。

われ老いたりと思う前に、諸君が皆亭々たる巨木に育っている姿を見て、名教自然の学園

を偲んでおります。

前略 個人の生活記録は、オートバイオグラフィで思い出の記として、案外楽なものです。が、集団の記録は、纏めるのが容易でなく、巨人軍の王監督の苦勞するところですが、此度のラグビー部創立六十周年史におけるジェネラル・エディターの御苦勞は察するに余りあるものがあります!!

御贈り頂きました対YMCAの戦績とソルター氏との会見写真のコピーは早速六十年史の二〇一頁に挿入しました。来る廿九日お目にかかるのを楽しみにしています。

煙洲会を通して、現在では直接**名教自然**のお教えを聞けるのは竹内先生お一人で、年賀状のご交信の外、右の様に教え子に対してもご懇切なご書簡を頂き感激一入の心境です。来る四月四日に満九十一歳になられる先生の益々の御健勝を心からお祈りして私と先生の思い出の拙文を終らせて頂きます。

(62・2・1)

竹内秀雄先生と私

機械昭和十年 荒井文治

一、最初の出会

一九二九（昭和四）年の初秋、神奈川県下中等学校英語弁論大会が横浜市YMCAの大講堂で開かれた。私も弁士の一人として母校代表で参加した。会場には母校の恩師、原田ばら（一〇二年担当）、市倉慶治郎（二一三年担当）、塩野叙光（三〇五年担当）、片山義行（四〇五年担当——片山先生は竹内先生の神中生の頃の恩師）の英語担当の諸先生が見えて居られ私を激励・応援して下された。先生方は皆故人となられたが昨夕のことのように思える。

私が当夕述べた内容は半世紀以上も前のことで定かではないが、当時の科学の進歩についてのことが大筋で、その夏世界一周のグラフ・ツェッペリン伯号（硬式飛行船）がはるばるドイツからこの国を訪れ、その巨体を見ることが出来たこと、無電が海難事故を救ったり、ラジオが家庭の楽しみばかりでなく、最も新しい天気予報を聞くことができるといったように、その進歩がいかに人類に幸福をもたらしたかを述べたように記憶する。この原稿は片山先生が添削して下された。

審査員席を見渡したところ、大へん目立つ先生が目にとまった。東海林太郎のような髪型にフレンチグレイの背広、エンジのネクタイと云ったまことにイキな姿であった。この人こそ竹内秀雄先生であったことが横浜高工に入学して思い当った。

二、入学と卒業

当時横浜高等工業学校には入試（ペーパーテスト）はなかったが私が志望した機械工学科では午前中に極めてシビアな三つの口試の関所があった。その一つに竹内先生が立会われていたようにも記憶する。その年の機械工学科は他の四科に比べ競争率は一桁多く十二・五であった。私は幸に合格の通知を頂くことができた。昭和五年の春、一・二年の英語の担当は竹内秀雄教授、他のお一方は大西友太教授であった。在校中の授業の折、竹内先生は入学前の県下英語弁論大会で私を見たことを憶えて居られ、このことを英語で述べられた。更に私を評されて *diligent boy* といわれたことはまことに嬉しく光栄であった。

私は二年二学期の終りに体調を崩し二カ年休学。昭和十年三月十五日卒業後は物理学教室の理博池内^{いけうち}本教授の助手として四年勤め航空工学科新設の折、物理学教室定員一名増により私は十四年三月三十一日付で助教授として任官し、教官食堂で毎週竹内先生と会食できる身分となった。

三、敗戦と学制改革——新制大学へ

敗戦三カ月後池内先生は疎開先のご郷里高田で逝かれた。敗戦を境に物理学教室の教官は私以

外皆変った。私のステイタスも十年経っても据えおきであつたばかりでなく、二十五年六月一日付で新制大学としてスタートした横浜国立大学への移行に際し助手に格下げされた。

わが横浜国立大学は高工・高商・県立男・女師範学校・青年師範の五校が一括された。基礎学科である物理学教室に居た私は他の基礎学科（数学・語学・体育・倫理など）の人達と共に師範学校系列の学芸学部の所属となつた。その折高工は最も人事選考は厳しく、その反対に師範系は最も緩やかであつたように思われた。私と同じ年又は以下の師範系の人達は皆講師になられた。しかし私にとって助手に落されたことは寧ろ幸であつた。旧制帝大出の理学部の物理出身の小壮新任教授の講義も学生に混つて聞くことができ、工学部と理学部の違いが良く了解された。

わが恩師、竹内秀雄先生は勿論新制大学の教授として就任された。私の先生には竹内姓の先生が三人居られる。一人は竹内強一郎先生で私達高工時代の電気工学及び実験を担当され、現在も九十三才で茅ヶ崎の広大な邸に健在である。他の一人は敗戦後見えられた理研の仁科芳雄博士の助手であつた竹内証先生である。私より二つ年長者。

四、横浜国大理科紀要

新制大学で教官の責務は教育と研究とが50%、50%とされ、研究成果は学会に発表するだけでなく夫々の学会誌、大学紀要に発表する約束となつた。私はささやかな研究（故池内本博士の遺されたフランス土産の高電圧装置を使わせて頂いた）の成果として、わが横浜国大を愛するが故

に学会誌よりも毎回横浜国大理科紀要Ⅰ（数・物・化）の方を選び、このNo.1より殆んど連続で約二十篇の放電図形——電気映像（リヒテンベルク・フィギュア）および人工雷石に関する論文を投稿した。幸い何れも没にはならず登載された。後で判ったことであるが他の地方新制大学の紀要に比べ、わが横浜国大理科紀要は質において学会誌並に扱われたことであった。この理科紀要は国際版（英文）で発表する約束になっていた。英文法に自信のない私は毎回タイプした原稿を持っては竹内先生のお宅に参上し完璧な英文に直して頂いた。先生はご多忙な中で少しも面倒がらず毎回加筆訂正して下さいました。私が和英辞典から引いた語句は先生の手にかかると極めて平易な語で表現されてしまうのである。完成し帰りがけには田中屋さんのもりをご馳走になるのが恒例となった。

五、定年退官より現在まで

この作業は先生が定年退官（昭和三十七年四月一日付）され、学部名称変更（文部省の指令で学芸学部を教育学部に変える件、学生は元の師範式に逆もどりする恐れがあると云う理由で全国の学芸学部中最後迄反対し、昭四十一年一月二十五日より同年三月末日迄スト。結局名を捨て実を取る行き方で解決）や、有名な全国的大学紛争（昭四十四年一月末から同年十一月末迄のスト対策）で私も体を傷めつけられたが定年退官（昭五十三・四・一）する迄続いた。

私が退官二年後大病で市大病棟に入院中（昭五十五年八月下旬より十月末迄）留守宅に郵送し

て頂いた先生の著書『寄席の息子と英文学』は妻が枕元で読んで聞かせてくれた。内容は学生の頃授業の合い間に伺った先生のお話より、はるかにほろろ面白かった。この頃は私の病氣も快方に向っている時であった。その後の先生の著書も皆手許に在って愛読した。

私は大病が回復してからは発明家をイジめる月例会で基礎電気・機械の講義ならぬ講釈を楽しみ乍ら続け、既に六十回に及びその原稿も六百枚となった。

先生は退官後、神奈川歯科大学、県立外語短大教授、日立技術者養成所教官を歴任されたと聞く。

竹内秀雄先生とおつき合いは、かくして五十八年になるが、どうぞ先生には白寿を全うされ、沢山の著書を出して頂き度い。

一九八七（昭六二・一・一四）記

W

機械昭和十年 犬塚 勝

竹内先生の授業の折に、当てられて英文を読む。その都度先生からWの発音を直されるが、どうしても先生の発音の様に出来ない。その後英会話部に入り勉強したが、遂にWの発音は直らずじまい。先生も諦められた様でした。

戦後何回か社用で英米その他の国へ参りましたが、やはりWの発音では苦勞し続けました。

不肖の弟子も古稀を過ぎ、入歯でのWは益々本物から遠ざかっていることでしょう。

煙洲会の席上で、大変お元気な先生のお姿に接する度に半世紀前のWの字が脳裏を飛来します。先生何時までも御壮健で御過し下さい。

竹内先生の授業の思い出

応化昭十年 笹 沼 宗一郎

私は東京府立第三中学校の頃は、英語は嫌いな学科でした。従って英語力も極めて貧弱なものでした。昭和七年に横浜高工に入れて戴き、竹内教授の御講義を受けるに至って初めて英語の面白さを知ったのであります。

当時我々は大西友太教授と竹内秀雄教授のお二人から英語を習ったのでありますが、此の両先生の講義は真に対象的でした。大西先生は教科書も Nature and Man とか The Meaning of Liberal Education の様な固いもので、発音などは全く無視して、読解力の涵養と正確な翻訳に重点を置かれた講義でした。外国人が聞いたら一言も分らないような発音で読まれ、『君達は and と言うと「そして」とか「何々と」としか訳さないが、文章の前後の関係で and には because とか for とか or とか but とか色々な意味になる事を忘れてはいかん』等と言われたものです。

これに対し竹内先生は My Adventure in England や第一次世界大戦のあと、ロンドンで数年間ロングランして記録的大ヒットした R. C. Sherriff の原作の演劇 Journey's End とか

The Best Short Stories of O. Henry の様な内容的に真に面白いものを選んでおられました。外国仕込みの綺麗な発音で先ずリーディングされ、その後でユーモアを交えた明快な翻訳をされ、我々は舞台を見て居る様な気持ちで講義を拝聴したものです。

私が戦後間も無く英国に行きロンドン塔やテムズの上流に遊んだ時に、My Adventure in England. の事が頭にあったので一層興味深く、良く見ることが出来ましたし、ベルギーの古戦場である Ypres (イープルは第一次欧州大戦の時の激戦地で、ドイツが初めて Mustard Oil. Dichlorodiethyl Sulphide. $(ClCH_2CH_2)_2S$ を『糜爛性毒ガス』として使用したので、以来マスタード・オイルをイープルの名を取ってイペリット (Yperite) と呼ぶ様になったので有名)を訪ねた時は Journey's End の塹壕の中の光景を思い浮かべました。

O. Henry は事の外面白く読み、殊に The Last Leaf は強い印象を受けました。この話は New York の下町の Greenwich Village に住んで居る画家志願の若い女学生が肺炎にかかり重体になります。窓から見える隣の家の煉瓦壁に這っている蔦の葉が折しも晩秋で毎日風に吹き飛ばされて少なくなっていくのを、ベッドの中から見守っていました。女学生はこの蔦の葉が全部散る時に自分の命も畢るものと自己暗示にかかります。しかしたった一枚残った葉が今日散るか、明日散るか毎日見えています、何時迄たっても散らずに残っています。その内に病氣も快方に向かい全快します。この最後の葉は、同じアパートに住む一生うだつの上らない老画家が風の強

い寒い晩に梯子を掛けて、油絵具で煉瓦壁に描いたものだったのです。老画家はこの時風邪を引き、これが元で肺炎に掛り死んでしまいました。

『これこそ老画家の最大の Masterpiece (傑作) だった。』と此の小説は結んでいます。

三十年以上前にニューヨークに居ました時に、家内の従妹がグリニッチヴィレッジに住んで居たのでよく遊びに行きましたが、このアパートが古い煉瓦造りの建物で、The Last Leaf もこの様な処を舞台にしたのだと懐かしく思ったものです。オー・ヘンリーの作品はこの他 After Twenty Years, The Green Door, The Cop and the Anthem, The Gift of the Magi 等十数編読みましたが、外国の小説はたとえ英語力が貧弱でも、翻訳で読むより原書で読んだ方が遙かに心に訴えるものが有る事を教えて頂いたのも竹内先生です。

その後学校を出てから、Edgar Allan Poe, Robert Stevenson, Agatha Christie 等や Jerome Klapka の Three Men in a Boat などは非常に面白く読みましたが、これ等は総て先生の影響です。竹内先生は単に英語を教えると言うだけでなく、英語に興味を持たせる事に重点を置いておられました。これが本当の英語の先生だと思います。

又授業の合間に外国で見聞きされた事を話されたものですが、今と違い外国は憧れの的であったので、非常に興味深く伺いました。

シカゴの球場でアメリカの大リーグを見物された時に、売り子が『エボナイトシート、エボナ

イトシート』と叫んで座席に敷くシートを売っているの、エボナイトで出来たシートかと思つた処、よく聴くと『Have a nice sheet』だったとか、カナダのケベクのホテルで夜、日記を書いて居られた処、突然窓が青く明るくなったので何かと思っていると、外で子供が『オーロラだ、オーロラだ』と叫んで駆けて行くので、空を見上げた処、美しいカーテンの様なオーロラが出ていたとか、色々面白いお話を聞かせて戴きました。

先生の授業は五十年以上経った今でも私の頭の中にハッキリと刻み込まれています。

オーロラなどは仲々見られる物ではありませんが、竹内先生はハレー彗星を二回見られたり、何か天空の自然現象に因縁がある方の様に思えます。

今でも我々のクラス会には毎回御出席願っておりますが、とても九十歳とは思えぬお元気で驚嘆して居ります。どうか何時迄も御壮健で御指導下さいます様おねがい致します。

先生と劣等生

応化昭十三年 石川志郎

現在保土ヶ谷にある横浜国立大学工学部は立派な設備となっているが、私が弘明寺の横浜高等

工業学校に入学した時は昭和十年で、未だ相当数の木造平屋のバラックが残っていた。基礎学科は大方ここで授業が行われ、バラックとバラックの間にある空地は、クローバーで覆われ、季節には白い花が一面に咲いて、若者達の将来を祝福してくれた。私達は休憩時間とか講義待ちの時は、窓越しに飛び降り、クローバーの上に寝そべって仲間同士の雑談に更けたものである。そして時間になれば、又窓を跨いで室内に入った。当時はまだ下駄履の者も可成りいて、時間前に先生が来ているのも気付かず、ベルが鳴ると窓から下駄履きの毛脛がニョキッと出てくる光景も屢々見られた。

このバラックの廊下は下駄を履いて歩くと響くので、注意書が張ってあった。私は物理の講義を聞く為にこの廊下に差し掛った。廊下は薄暗い上に逆光となるので見通しが悪い。私は下駄履の常習犯だったので注意を守り、足元に気を付けながら歩いて行った。暫くしてすぐ前に人が立っているのに気が付いた。目を上げると同時にしまったと心の中で叫んだ。竹内先生である。

『石川君じゃないか。君来ていたのか』

先生は怖い顔をして云われた。

『ハイッ』私は直立不動の姿勢をとった。

実は前の時間が英語であり、私はこれをサボって授業の終わった頃を見計らって物理教室に行く魂胆だったのである。

『どうして出席しない——』『……』

私は応化の主任教授に、竹内先生から石川の欠席が多いという注意があったと云われた直後だけに、返す言葉もなく、ただ背筋に汗の流れるのを感じてつつ立っていた。

卒業する年の高商との野球の定期戦では、柄が悪い為に私は警備をやる羽目になった。

球場のスタンドは一杯となり、外国人の一回が通路に溢れて坐り込んでいた。役目上これを立退かさねばならないが、大勢の観衆の前で下手糞な英語を喋ったら学校の恥だし、手真似で追出すこともプライドが許さない。さてどうしたものかと思案している時、たまたま竹内先生が直ぐ傍のスタンドで観戦しておられるのが目に止まった。そこで早速先生にこの連中を通路から出るように云って頂きたいとお頼みした。先生は君はそんなことも云えないのかと云って立上り、連中の前で首を横に寝かしたり、両手を腰の辺りで広げたりしてペラペラと立て続けに何か云われた。勿論私には先生が何を云っているか理解出来なかったが、要するに理解出来ないくらいの言い方をしなければ通じないのだから、私が先生にお願したのも已むを得ないのだと自分に思い込ませようとした。通路の人達は黙ってそろそろ退去し、私はこんなことに先生を煩わしたことを申し訳なく思いながら、先生に向ってただ深々と頭を下げたのである。

会社勤めをするようになってから、新設備購入の為西独に行く機会があり、帰途パリに遊んだ。フランス語は全く知らないので、貧弱な英会話で間に合わすしかなかった。小説や映画によく出

てくるような所を歩いたりタクシーに乗ったりして見て廻り、夜には飲み屋をハシゴして、タクシーでホテルに戻ったのは街が漸く明るくなり始めた頃であつた。

午前中には空港に行かねばならぬので、三時間位は寝たのだろうか。出発の準備の最中に財布のないのに気が付いた。何処を探してもない。タクシー代は払ったのだから無くなったのはホテル内か室内である。しかし室内隈無く探したが見当らない。頭がカッとなり顔は熱くなってくる。フロントに行き、ホテル内で財布を拾って届けにきた者はいないかと云ったつもりだが、遊んでいる時あんなに通じた英語もここではさっぱり通じない。なけなしの單語を必死になつて吐き出すのだが、相手は目を大きく開いたり、両手を拡げたりするばかりである。時間はどんどん経って行く。ホテル代のこと、空港の時間のこと、私は絶望的になり、両手を合せて竹内先生と叫びたくなつた。その時もう一人の係員がフロントに入つて来た。どうかしたのかと前の係員にたずねたのだらう。私は今度はその男に説明する為にまず自分の部屋番号と氏名を知らせた。すると後は何も聞かないでその男は軽く右手を上げて頷ずき、金庫から財布を取出して目の前に置いた。私はヘタヘタとなつた。

要するに、タクシーから降りる時財布を落し、運転手が拾つてここのお客様の物だといつてホテルに届けてくれたのである。私は筆舌に尽し難い喜びで一杯となり、誠に申し訳ないことに、先程の竹内先生のこととはどっかにスッ飛んでしまい、代つて運転手の顔が後光と共に浮んできたの

である。

それから約二十年後、級友に勧められて煙洲会に始めて出席した。学生の頃からの習慣で一番後の席に坐ったが、ふと上座を見ると正面に髪こそ白くなり、体形も細目になられてはいるが、まぎれない竹内先生が坐っておられるではないか。しかも何となく私の方を見ておられるように思えてならない。私は一瞬学生時代の指名の不安におののいた気持がよぎったが、直ぐ懐しさに掻き消され、私は先生の顔許り見ていて、その時どんな話があったか、今は思い出せない。閉会后、皆は先生を中心にして出口の方に向われた。私は皆を掻き分けて先生の前に出て名前を申し上げ、お世話になったお礼を述べた。先生は歩きながら、石川君ねえ、と云われたが記憶にはないようなご様子であった。勿論私はそんなことは毛頭期待していなかった。そしてブラック建の校舎の廊下でやっと同じように、其の場に直立不動の姿勢で立ちつくし、先生が退場されるのを涙ぐみながら見送った。

竹内先生と私

電化昭十三年 佐藤主計

竹内先生は神中（旧神奈川県立第一中学校）の大先輩で、私が生れる三年前（大正三年）の卒業で、又旧高工の恩師でもある。二十一年の先輩であるから、自分の年齢にその数を加えて見ると、今年四月の誕生日には九十一歳の御高齢である。

又先生は純粹のハマッ子。私も野毛山に近い一本松小学校の隣で生れ、ハマの洗礼を受け七十年、先生の後を追っている。

昨春秋、私の書棚から昭和十二年十一月一日（小生高工三年在学中）、名教自然碑建立の式典があり、~~ハ~~縄もそのまま鈴木煙洲先生が側に立っておられる記念写真を発見した。菅先輩に乞われて引伸し、一葉を九月の煙洲会で先生に差上げた。すると早速次頁の様な丁寧なご返事を戴いた。お許しを得ず掲載させて戴きます。それは先生のお人柄が、感謝と愛の精神と即行力（思いついたことをすぐ実行する）をもたれる方であることをうかがわせて恐縮、敬服しているからである。又之が先生の長寿の源の一つではないかと教えられます。

先生の百歳のお誕生日を楽しみに益々ご壮健であられることを祈念致します。



前畧

去る廿四日、煙洲へて、「名教自然碑」の字を以て惠贈
頂き、宛上有難うの座いり、心からいしめ申し上ります
翌日、早速、弘明寺の宮庭街へ行き、額縁を買ひ
あり、字を納め、老生、初穂写（今日では、孫達、遊び場
となって全く乱雑と極めておりますか）の正面に掲げて、
恩師煙洲先生を偲ぶと、今世に、貴君の芳志を思ひ、
感謝しております。

抑て、去る廿二日の彼岸に、已に五ヶ年が、昇天いたしました妻の
墓参に鎌倉霊園へ長女と一緒に参りました際に、お年九十歳
老生は、染々、この身が老い、感じました、先きでた、歎句をもしました。
お下さい、「妻恋しわれも老いたり秋彼岸」

註 名教自然の写真は、五十年を記念して、煙洲会を通じて希望配布を考えています。

大岡町一八五二番界限

—先生への詫び状—

応化昭十四年 丸 井 大 陸

昭和十一年三月高工受験の宿泊先は竹内先生の近所であり、消費組合の先輩が案内された。この人は電化の増田光男さんで、結局その時の縁で入校後下宿もこの大谷さんという家にお世話になった。

茫々五十数年をふりかえり、たしかでないが高工の南端にあったレーゲン先生の官舎を左手にみて、丘の方に進むと竹内先生のお宅があり、坂を少し登ると、崖をきりくずして谷間の様な所に下宿屋があった。同居人は野球部の捕手・小野秀雄さん、センター・加藤由次さんで、二人とも護国の英霊と化した。

その外に電化の清水篤二さんが一緒であり、先生の家の前の大谷さんにはショート・岩藤年男さんとセカンド・牧野保さんが居られ、そのため野球部に興味をもつことになった。

先生のお宅は低い木柵にかこまれ、庭に草花があり瀟洒なお住居であった。

毎日幾分プレッシャーを感じ乍ら、あてやかな奥さまをちらりとみて通学した。丁度ご長女の恵美子さんが中学のセーラー服姿で、五人の令嬢が居られ、一番下の娘さんが下宿の孫娘の所によく遊びにこられた。

先生のお宅は当時めずらしく塀のない田園調布方式で、随分進歩的な家だと思った。それに電話のあるのもめずらしかった。その頃は教授の家でも電話はそんなに普及してなかった。

当時の住所録にある先生の電話番号は一三八二番であるが、今もそのままである。

私が在校時代先生は本業の他に生徒主事、籠球部部長、ESSの英語会、聖書を読む会を指導して居られ、わがクラスの者はそれぞれ厄介になった。

先生の講義で忘れられないのは、タイタニック号の最後のくだり、讚美歌を合唱し乍ら、船長達が沈み行く船と運命を共にする場面で大変感銘をうけ、名調子であった様に思っています。

籠球部は当時精強の日体、商大専門部を破り、関東専門リーグに優勝した年で、新田見治雄、小島隆、山本章、中野五郎、内田義行の選手を擁し全盛時代であった。

昭和十三年の夏休みは非常時につき、有意義に利用せよと、文部省と校長会できまりプールを掘削することになった。この動議に抵抗して当時生徒主事の竹内先生を大変なやませ、クラブの総代山本君は籠球部の委員長でもあり、彼が先生との間に入って苦悩しました。温厚なる先生は、はやる生徒を諄々と説かれ、大きな問題とならず、解決され、後日何とかあのプールが出来あが

りました。

先生に随分失礼な言動をあびせ、ご迷惑をかけて、今でもすまないことをしたと自責の念で一杯です。前年電化の『バカヤロー』事件があり、今思うとぞっとします。五十年経過してクラスを代表して先生に深くお詫び致します。

思い出の断片

応化昭十六年／十二月 服部 誠

竹内先生は商工実習学校の時から存じあげているので、実にながい御交誼を頂いたことになるが、素晴らしい先生に遭遇しながら、当方が良い生徒でなかったので、英語力はまことに忸怩たるものがあり、戦中・戦後を通じ長いブランクがあり、寄稿できるような者ではないが思い出の断片をつづらせて頂く。

私の生家は貿易商であったので、何となく英語は好きだった。どちらかというと文科系に進みたい気持が強かったが、折しも「大学は出たけれど」という昭和初期の不況時代であり、一ドルが二円何銭という頃で、為替相場で儲かってしまったとか、損してしまったと言っているより、

これからは工業振興の時代になるからお前は工業へ進めという父親の言いつけで、商工実習の応用化学科を受験、入学した。

どういう経緯であったか、当時すでに高工教授であった竹内先生が英語の授業を数カ月受持たれて、初めてお目にかかったのである。

多分どなたかの代講で、臨時にお教え頂いたのだと思う。シャルとウイルの講義をされている時に、Hという生徒が「ユウ・シャル・ダイ」と後ろの方から野次をとばしたので、先生は非常に激怒され、私は諸君に授業をつづけることはできないと退室されたことがあった。先生には、或いはもう御記憶にないことかも知れない。

この生徒は、シェークスピアの台辞の一つぐらいの気持で、シャウトしたのではないかと思う。昭和十二年に日支事変がおこり、シノ・ジャパニーズ・インシデント（ウォーではない）と教わった気がする、その頃のことである。

後年、私が今の職業についてから、英国のメーカー部長が輸入元と会社にくられた時に「英国製品はシュッド・ビー・インポート」だと言ったら、輸入元は慌てて制止しようとしたし、英国人は「何故だ」と質問してきた。「日本製品は米英製品に追いつけ、追いこせと一所懸命にやっているが、まだまだ十分ではない。先進国製品であるあなたのところの製品などは、更にどんどん輸入されるべきであると私は考える」と答えたら落着した。

シャルとウィルの使いわけは難しい。

さて、五年間の実習学校が終る頃、父親がもう少し学生生活が続けても良いと、横浜高工への進学を認めてくれたので、再び竹内先生に接することになった。

先生の最初の授業時には、日本語なしの英語だけで入学のお祝いや横浜の紹介などがあって、地方出身者などは吃驚させられたことである。山の手がブラッフで、海岸通りがバンドであることは今でも覚えていいる。

竹内先生の授業では、発音記号による発声訓練を非常にやかましく教育された外、ことわざやフレーズは丸ごと覚えさせられ、そのうちのいくつかは今でも忘れていない。

そうかと思うと、昨日ごろんになった映画がどんなに素晴しかったかを熱く語られたこともある。ダニエル・ダリューの『暁にかえる』というのが記憶にあるから、あのタイプの女優さんがお好みだったのかも知れない。

テキストにメドレーの「イングランド・アズ・シー・イズ」や「イングリッシュ・エコー」を採用されたのも、話せる英語にも深いご関心があったのころと思われる。これらは後年になって、そう思い当たったわけで、学生時代に理解していたわけではない。

私は新聞部に入ったので、ESSの取材に森キャンか明葉での会食会に出席させて頂いたら、これは全くの日本語ぬきで、ソサエティに加入も勧誘されたが、山岳部やら応援団やらに入って

極めて忙がしく、この会に出たのはこの一回きりだった。

その後、結核性肋膜炎からカリエスとなり、極めて不健康な学生生活を過したので、私は決して良い卒業生というわけにはいかない。竹内先生についての記念出版に寄稿できるような者でもないが、ひとつだけこれからの方にお伝えしたいことがある。

先ほど少し触れたように、今でも欧米人に逢い、話さなければならぬことがたまにあるが、ヒヤリングがまあまあで、とても良い発音なのに、話ができないというのはどうも分らぬ、お前さんは本当にしゃべれないのかと尋ねられるのである。

あまり英語を使う機会がなかったので、錆びついているんだと答えることにしているが、私の発音は、竹内先生の万国音標文字という発音記号によるお仕込みのおかげなのである。ただグラマーやコンポジションを一所懸命にやらなかった報いを、今うけているわけである。

コンプレックスで、メタボリックなこれからの日本の第一線でこれから活躍される皆さんには、是非英語の実力をつけて頂きたい。

不肖の生徒が、卒寿の賀をお祝いする文章としては、どうもピンボケの感じではあるが、学生時代の勉強の失敗が、悔いを残すということを綴ってみた。文意をおくみとり願いたい。

昭和十六年十二月に繰上げ卒業第一回生として社会に送り出され、紆余曲折四十年を経た昭和五十六年からクラス会を毎年開くことができるようになり、竹内先生とは毎年お目にかかること

ができる。先生の博覧強記とスピーチのメリハリの巧みさは定評のあるところで、毎回錦上花を添えて頂けるので、会員の楽しみのひとつになっている。

竹内先生のますますのご健勝をお祈りすると共に、毎年のクラス会へのかわらぬご臨席をお願いして擲筆する。

お世話になった竹内先生

電化昭十六年／十二月 丸 岡 勝 美

竹内先生は勿論、横浜高工の恩師である。同時にわが母校神中（横浜一中）の大先輩でもある。即ち先生は大正三年第十四回卒業で、私は昭和十一年第三十六回生、つまり二十二年前の大先輩である。

経済的理由から神中を出て三年間、東京逓信局電話線路工手の監督の様な実生活を経験した私は、昭和十四年春の入学定員倍増のお蔭で、難関といわれた横浜高工電気化学科に滑り込み入学出来た。

入学してみると、応化橋本先生、英語竹内先生、それに電化の中島先生と、神中先輩の教授が

居られるのに驚いた。働いている間、学生生活を愉しんでいる友人を羨望の眼で見っていたので、入学当初はともかく私は毎日休まず学校へは行くのだが、徐々に教室には出なくなって、運動場や図書室、校門前の阿波屋でゴロゴロしている時が多くなった。

そんな中で、竹内先生の英語には比較の出席した方である。夏休みにテキストの予習の為、コンサイスで判らぬ単語を大分先まで調べたりした。このテキストは横浜空襲で焼失したが、もう一度眼を通してなくなって、焼け残った同期大野君から近年譲りうけた。

A. W. Medley の ENGLAND AS SHE IS (定価一圓二十五錢、三省堂)である。

先生は、昭和十四年夏第一回の興亜青年勤労報国隊に指導教官として参加された。たしか先生はこの時、長髪を坊主頭にされてしまった。余程のお覚悟であったのだろう。この時は陸軍関係で北支蒙疆派遣隊で、大分御苦労されたようだ。参加学生は背囊を負い、三八式歩兵銃を手にしていた。二期期の教室に現れた先生は、やはり相当憔悴して居られる様にお見うけした。戦雲の漸く濃くなり始めた頃の生徒主事として、先生の立場は容易でなかったと思うのである。

高工神中会の集りにも、先生はよくご出席頂いた。

私の戦後の生活は惨憺たるもので、書くのも気がひけるが、昭和二十七年夏駐留米軍に転り込んで、特需検査官になった。特に英語の素養があるわけでもなく、たまたまそこに空席があっただけである。有隣堂でコンサイス英和を求め、これを唯一の頼りにして勤め始めた。定価は三百

八十円だったが、このコンサイスは記念に今でも持っている。

勤めてみるとここにも、高工同窓が幾人か居た。担当は一番簡単でトラブルも少い高圧ガスの検査だった。私もそれなりに勉強して、一年後には全国のガス検査官を集めて講義をする迄になり、しかも今日まで高圧ガス業界で生きてこれたのである。

二、三年後、語学試験を受ける機会があった。竹内先生がその担当だと聞いたので、夏の或る日、始めて高工裏の先生のお宅に参上した。先生は一週間位前からの英字新聞をよく読みなさい、と申された。

試験会場は母校高工の教室だったが、自分ではとても自信のある答案とは言えないものであった。

しばらくたった後、検査課の朝のミーティングの時、課長補佐の二世から、私が語学手当最高の三十パーセント相当と、試験係から連絡があったと発表があった。課からは二十パーセントの推薦だったので、私も全く面目をほどこしたが、とても実力相応とは思えず、今考えてもこれは竹内先生の御高配によるものに違いない。私は当時月給二万円位であったので、本給を始めその他の手当についても総てが三十パーセントのアップとなって、幾年分かの定期昇給に相当した。これは当時家計を潤すことになって、病後の家内に喜んで貰えたものである。

昭和三十一年のことであった。

米軍の日本占領時代が終って、もう進駐軍という言葉も遠くなった。しかし、あの混沌とした戦後から立ち上りつつあった当時に、先生がお手のものの英語を駆使して、各方面で活躍されたことを改めて思うのである。

お元氣な先生には、いつまでもご健康でご長寿を保って頂きたいと祈っている。

(六一・一二・二九)

竹内先生と私

機械十七年／九月 伊藤良彦

すでに現役を去っている私は、散歩のコースとして時おり旧県立商工実習学校の周りや昔の横浜高等工業学校の裏道を抜けて横道に入り裏山へと上って行く。そこにはもう私をはぐくんでくれた住居はないが、私の幼な心にきざまれた竹内先生のお宅の玄関と洋間がある。

私が父に連れられて横浜へ出てきたのが大正十三年で四歳の時、住居は当時の横浜高等工業学校の裏にあり、遊び場は主として裏山であり、その地続きの浅間山と呼ばれた岩場であった。ある日、茅葺き屋根が立ち並ぶなかに、当時としては珍らしい洋風の玄関と洋間のある家が建てら

れているのを見て、子供心に大いに関心を持った。やがて、その家で開かれるようになった日曜学校に喜んで行ったことを覚えている。それが現在の先生のお宅である。

私たちはいくつになっても、昔と同じことを経験し、あるいは昔と同じ気持ちを味わった時、その気持ちをとりもどしたくなったり、昔にかえってみたいと思うことがあるようだ。

私は商工実習学校の機械科へ入学して、最高学年になると英語は隣りの横浜高工の竹内教授と聞き、その最初の授業を教室の一番うしろの席で緊張しながら受けたことを思い出す。それがやがて先生の個室へ出入りするようになり、横浜高工時代には英語の授業を意識して一番前の席で受けるようになった。

戦後、私のスタートは商工実習学校の教員から始まった。

それは十年余り前のことになったが、もう一度先生のお宅を訪問する機会があった。昭和二十三年の学制改革で県立商工実習学校は県立商工高等学校に変わり、昭和四十九年に南区大岡の地から現在の保土ヶ谷区今井町へ移転したばかりの新校舎へ、七年間他校へ転出していた私が、八代目の校長として再び赴任してきた時のことである。勿論恩師としての先生に、ご挨拶と報告をするためであった。

私が先生を前にして多少固くなりながら話をしているなかで、先生は私のことを子供の時の呼び名である「良っちゃん」とごく自然に口にされたのである。近所に住み、私の亡き母の友人で

もあつた先生の奥さまからは、そのように呼ばれた記憶はあつたが、思いもよらない時に、思いもよらない人から、そう呼ばれると、私は思わず目を伏せ、先生の私にもつておられた暖く深いお気持ちをありがたく思い、ほのぼのとした気持ちで一時を過ごしたことがあつた。その後も、時には地下鉄内で、あるいは宴席で隣り合わせた時などで、私は「良っチャン」と呼ばれている。

私は現在、先生にお会いできる機会に恵まれている。商工実習と横浜高工時代の卒業生の会は、先生を中心として開かれることが多いからである。私はできるだけ先生のお声の範囲に席を占めるように心掛ける。先生のお話をしている姿は、生涯学習をされているお手本として、その生き方を私たちに示されているように思う。

先生のお年は私よりもふた回リ上、父なき今、お話を聞く私には、いつも遠い昔の耳に残る呼び名を懐しむ気持ちから、先生に対する甘えが私のどこかにひそんでいるような気がするのである。今年で91歳になられる先生のご健勝を心からお祈りしたい。

(昭六十二年二月八日)

私と外国語

機械昭十八年／九月　中村稚晴

竹内先生の授業で憶えている事が幾つかある。最初のは、英語が日常生活に染込んでいることの例としてあげられた小話で、ある軍人（だったと思う）が英語まじりの会話に怒って「君達がそうやって英語を使うから日本語がスポイルされちゃうじゃないか」と怒鳴ったという話だった。当時は日米開戦間近で、英語は敵性語と白眼視されつつあった時代で、もう少し進むと、野球でもバットを「打棒」、ストライクを「よし」という様になる状況だったからそれだけ痛烈な印象となっている。またある時、何の説明の為かは忘れたが、英国での見聞に言及され、英国では行列に割込む者があると、皆が「Shame on you（恥を知れ）」と非難してやめさせるという話された。その後私が家庭教師をしていた時、前置詞 on の使用例としてこれを思い出した。だがその時、Shame は名詞だから Shame on you はおかしい、先生は (Be) ashamed on you といわれたのだらうと勝手に解釈し、また Be は慣用句で省略されたものだらうと考えて、ashamed on you と on を使うのだと説明した。後で調べたら岡倉でも斎藤でも Shame on you だった。でも私が教えた少年は早稲田の理工学部に入ったので、そんなに責任を感じなかった。

私は中学も東京府立工芸学校という工業学校で、英語の授業も少く、卒業した頃の語学力はゼロといってよいと思う。もっとも、好きでドイツ語は少し勉強した。ドイツやフランスの歌を原語で唱いたかったのと、すじむかいに住んでいた小学校同級の少女が、家業の化粧品製造の為、後に薬専に入った関係でドイツ語を勉強していたので、彼女がドイツ語を教えてくれ、私が数学を教えるという間柄だったからである。おかげで高一一年の頃のドイツ語は楽だった。ある時佐藤先生が黒板に“Im Westen Nichts neues”と大書して、“これ何と訳すか分るかな”といわれた時、即座に“西部戦線異常なし”と答えたら一瞬教室中が“おっ”とどよめいた事がある。自慢話の一つである。また川西航空機に就職試験に行った時、趣味の一つに映画鑑賞と記した為か、総務課長から“会議は踊る”はドイツ語ではと聞かれて、慌てて“Der Kongreß tanzt”と答えたら“さでなくてでしよ、でも流石ですね”と慰められた。帰って級友に話したら“俺達だったら全然答えられなかったよ”とまた慰められた。

工芸の精密機械科は私達の時、競争率が二十五倍という空前絶後の激戦で、クラスには開校以来の秀才といわれた莊司を初め秀才がぞろぞろで、私なんかいくら頑張っても半分まで上れなかった。僅か三十名のクラスだが上場会社の社長や役員が何人もいる。数年前亡くなった渡辺は五年間ずっと二番で、特待生で通し、一橋大（の前身の専門部）卒という変った道を辿って一代で神田通信工業を築き上げたし、竹内は当校の三年先輩で、今、日本信号の社長をしている。飯村

は同じ頃から東芝機械の社長だが、桐生高工を恩賜で出ている。莊司は神田通信の、日比は牧野フライスの役員である。（ついでだが、機械工学科の二年先輩に小学校同級の成田がいる。入学してから教室でばったり会って驚いた）。

そんな訳で、工芸を出た頃はすっかり勉強嫌いになり、学校から勧められるままに日本光学に入った。光学会社というのは精密機械工業であり、中等工業で精密機械科を設けている所が珍しい為、先輩が沢山居て工場長以下中堅所を占めて居り、私も他の工業学校出より優遇されたし、仕事も面白かったが、大・高等出が一年で技師になれるのに工業学校出は十年かかる事とか、完全な東大閥である事に嫌気がさして、当時航空工業の初代校長になって居られた恩師に相談、当校を受ける様勧められ、二年半で退社して、父が同郷で親しくして頂いていた藤森さんが創設された「考え方研究社」という予備校に通った。難関は英語。当時、参考書として小野圭英語が好評で私も使ったが、丁度その頃、村井・メドレーの「三位一体式」というのが刊行され、私にはこれが良かった。何回も繰返して読んだ。考え方研究社の講師野原三郎の「英語の学び方・考え方・解き方」もよかった。他にライオン・ブックというのも使ったが、受験当時の私の英語の力は殆ど前記二冊のおかげといつてよい。そして結果として私の英語は文法偏重で単語は全然だった。野原講師が「君達のボキャブラリーはboy, boysなんているのを入れても三千位じゃないか」と冗談めかしていわれた事があるが、全くその通りで、当時受験には四千語が必要といわれている

たが、私なんか半分位ではなかったのではないか（今でもそんなものか、もっとひどいかも知れない）。

竹内先生の講義に使われたテキストは、コンラッドの「オルメイヤーの阿房宮」だったが、ストーリーについては殆ど記憶がない。ただ私は会話が出来る様になりたかったが、難関はヒヤリングだと思っていたので発音に注意し、*σ*と σ 、*ε*と ϵ などの違いに気をつけた。おかげで朗読の時には先生から度々ベリーグッドの評を頂戴した。ところが或る時、睡眠不足の為だったが、いつもは頭の中で訳しながら読むのだが、その時は考えもせずに棒読みに読んで、はっと気がついたら一行飛ばして次の行を半分近くも読んでしまっており、顔が熱くなった。

そんな状況だったが、繰上卒業で海軍に入り、金沢八景の航空技術廠支廠（今、市大や東急車輦が入っている）で技術士官として重爆撃機搭載の射撃照準機の研究を担当する様になったら、撃墜したB-17から押収したスペリーの射撃照準機のマニュアルを初めとして、英語やドイツ語の文書が結構あって、戦時中も縁は切れなかった。

戦後は勿論、カタログや技術情報で縁が切れるところではない。

大分前から毎晩ベッドで睡眠薬代りに何か読むのだが、二十年程前に読んだアガサ・クリステイの「アクロイド殺し」は一日一頁程辞書を引きひきだしたが、おかげで麻雀の牌のワンズは「キャラクター」、ソーズは「バンブー」、ピンズは「サークル」、発は「ドラゴン」等と呼ぶ

昨年四月十一日、私もハレー彗星を見にシンガポールへ行つた。十二月にも、絶好期といわれた三月中旬にも、十日程の間毎晩三時に起きたのに、家からは遂に見る事が出来ず、彗星の高度の高い南方でと考えたのである。子供の頃父に聞いて以来の憧れで、どうしても見遁したくなかつた。グアムは手軽だが、事の性質上暗い所へ行かねばならないのに治安が悪い点が難で、たいして旅費の変らないシンガポールにした訳である（オーストラリアの半額位）。彗星の高度が約45°とグアムより有利な事、夜間飛行で、天候に関らず機上で見られるという計算もあった。シンガポール航空で調べて窓際の席をとったが、場所が良かったので他の乗客が代る代る星を見に来た。中の一人が、私が解説書を広げていたからだろう。他にもハレーを見にシンガポールへ行く人があるとは思わなかつた”といつて、着いたら一緒に見に行く話が出来た。ところが現地で聞いたら、毎夕スコールがあつて、その後は雲が高く（事実、毎日その通りだった）、星を見るのは難しいという事でガックリ来た。しかし、折角来たのだからと、夜中に前記の男とハイヤーを飛ばして海岸の一番暗そうな所を探したら、何とハレー彗星から南十字星までの間だけがポツカリと雲が切れていて、夜明けまでずっと観測や撮影が続けられるという幸運だった。私も多少は星座の知識があつたが、彼はくわしくいろいろな教えてくれ、大助かりだった。

昨年四月十一日、私もハレー彗星を見にシンガポールへ行つた。十二月にも、絶好期といわれた三月中旬にも、十日程の間毎晩三時に起きたのに、家からは遂に見る事が出来ず、彗星の高度の高い南方でと考えたのである。子供の頃父に聞いて以来の憧れで、どうしても見遁したくなかつた。グアムは手軽だが、事の性質上暗い所へ行かねばならないのに治安が悪い点が難で、たいして旅費の変らないシンガポールにした訳である（オーストラリアの半額位）。彗星の高度が約45°とグアムより有利な事、夜間飛行で、天候に関らず機上で見られるという計算もあった。シンガポール航空で調べて窓際の席をとったが、場所が良かったので他の乗客が代る代る星を見に来た。中の一人が、私が解説書を広げていたからだろう。他にもハレーを見にシンガポールへ行く人があるとは思わなかつた”といつて、着いたら一緒に見に行く話が出来た。ところが現地で聞いたら、毎夕スコールがあつて、その後は雲が高く（事実、毎日その通りだった）、星を見るのは難しいという事でガックリ来た。しかし、折角来たのだからと、夜中に前記の男とハイヤーを飛ばして海岸の一番暗そうな所を探したら、何とハレー彗星から南十字星までの間だけがポツカリと雲が切れていて、夜明けまでずっと観測や撮影が続けられるという幸運だった。私も多少は星座の知識があつたが、彼はくわしくいろいろな教えてくれ、大助かりだった。

松下の社長をしていたので聞いたら、日本語が通じるから心配ないと言っていたが、飛行機に乗った途端から英語だった。現地でも翌日から単独行動だったが、ホテルのフロントや交換手とも何とか話は通じた。ホテルでは面倒臭い為だろう、しきりにタクシー利用を勧めたが、住民に聞きながらバスで廻った。全く予定になかったマレーシアの一角にも足を入れたが、ジョホールバルの通関で係の言葉が仲々聞き分けられず、三、四回聞き直した様な苦労はあったものの、殆ど用が足りた。

帰りの便でも往きと全く同じ席がとれた。スチュアードスが憶えていてくれて、
“往きも同じ席でしたね。ハレー彗星御覧になれましたか”などと親切にしてくれた。救命具の使い方なんかを日英両国語でアナウンスする、すらっとした美人だったが、その時の日本語が綺麗だったので
“随分日本語が上手ですね”といったら
“私、日本人です”といわれてしまった。それから日本語で話したが、機内食の残りのパンを持ち帰ってよいかと聞いたら、
“どうぞ。袋にお入れしましょう”と手提袋に入れてくれ、
“ついでに少々記念品を入れて置きました”との事、帰ってあけて見たらシンガポール航空のマーク入りのカード（今、毎週一回集ってコントラクトブリッジをやっているので丁度よかった）やコーヒーカップなどだった。弟の話では最近はその様な記念品をくれる事は滅多にないとの事。

それもこれも英語が全然だったら起らなかった事だろう。ふんぎりもつかず、きっかけも掴め

なかっただろうから。先生有難うございました。

野球の話

機械昭和十九年／九月 中山 一郎

もともとハマッコとベースボールは縁の深いもので、私も小学校へ行く前からグローブを買って貰って、遊んでいたものである。勿論始めの頃はオミソで、ファーストとセカンドの間、ライトの前あたりに坐らされていたのを子供心の記憶で、残っている。ベールースやゲーリッグを見たのも、その頃の仲間というより大先輩のお兄さん方につれてゆかれたからであった。

高工へ入学したら、中学の会があるので、出席しろという。出たところに竹内先生がいらっしやった。二十数年の大先輩である。当時私の中学は一回戦から、良くて二回戦で敗退するチームである。野球の話などは出る筈はなかったが、授業中に、たまたま火の玉投手ボップフェラーの話が、生々しい観戦談として聞かされたあとの会合で、先輩諸兄から先生は大リーグにくわしいと聞いたことと、当時、新聞部でスコアのつけ方を教えてくれた江間先輩から、「この方式は大リーグの流儀で、日本式じゃないよ。」などと能書きを聞いていた私は、先生に、この前の定期

戦のスコアは大リーグ式でつけましたという話から、子供の頃にアメリカの大リーグを見て、彼等の桁違いの野球技術の話をしたところ、出るわ、出るわ、生れる前の明治の頃の野球の話から始って、横浜と野球の話、メジャーリーグの話、私の知らない早慶を始めとした六大学の選手の話などを聞かされて、私も子供の頃から、早慶戦を始めとして、出来た許りの職業野球も、兵隊帰りの沢村のピッチングも見たことがあり、少々は野球のこともくわしい方だと自負していたものだが、この先生は野球の論文を書いた先生ではないかと驚いた次第でした。

個人的にはタマに新聞部の原稿を頂きにお会いするぐらいの先生でしたが、これが先生の第一印象でした。

その後は授業中にも上手に話を野球の方に引っぱって、先生から話を引き出し、クラスメイトに喜ばれたことが再々ありましたが、あとでどのクラスも先輩もやっていて、先生は御承知の上で、話をされたり、楽しまれているのだと聞かされましたが、当初は、うまくやったものと、クラス一同楽しんだものでした。

尚、私がスコアをつけた定期戦は昭和十七年のことで、最後の定期戦となった。一勝二敗の年でした。この年横浜で全国高専大会があり、その予選決勝で高商と当って勝ち、通算二勝二敗のまま、全国大会の決勝では勝負をつける対戦となって、橋本、戸来の投げ合いは延長十四回、戸来のワイルドピッチでサヨナラ勝ちでケリをつましました。パスボールした高商の捕手小田野が、

マスクをとって後をふり向いた顔が、バックネット正面でスコアをつけていた私には未だに目にやきついております。これが最後の高商戦でした。

もう一つ、一、二回戦ボーイだった中学の後輩が、高校になってから甲子園に出ることがありました。私達は、情けないことぞ、と嘆いたものでしたが、多分、先生は、後輩よくやったと手を叩いて喜ばれたことと思います。

竹内先生と(財)横浜工業会

応化昭十九年／九月 佐藤 菊 正

竹内先生は、昭和五十五年秋に『寄席の息子と英文学』と題して装幀も内容も素晴らしいご著書を自ら出版なされ、多くの方々に贈られた。

丁度時を同じくして横浜国立大学工学部と同窓会との協力によって工学部創立六十周年記念事業計画が実施されようとしていた。

又、かねて懸案の大学院博士課程設置の実現も真近である状況を踏まえて母校の研究・教育を助成することを目的とした財団法人横浜工業会の設立について文部省からの示唆があった。そこ

で、稲垣大学事務局長、横山工学部長（現学長）、中川同窓会長および各学科同窓会長が協議の結果、財団法人横浜工業会（基本財産として二億円）の設立を決定し、募金活動を開始したところであった。

昭和五十五年初秋の或る日のことでした。竹内先生が小生の研究室におみえになって、つぎのようなことを言われた。

「今回、わたくしは『寄席の息子と英文学』と題する著書を自費で出版しました。出版した部数の半分は既に存じよりの方々に贈りましたが、残りの半分は財団法人横浜工業会設立準備会に委託するから、卒業生の希望者に実費（送料を含む）で頒けて下さい。その売上金は財団法人横浜工業会設立のために役立てていただきたい」とのことでありました。早速これを準備会に諮りましたところ、先生のご厚志を有難くお受けすることになりました。

皆様もご承知のように、竹内先生は元横浜高等工業学校教授、元横浜国立大学教授および横浜国立大学名誉教授の筆頭である。そして煙洲先生を最もよく知っている最長老であり、煙洲会の重鎮である。この竹内先生が横浜工業会設立に対して多大のご理解を示して下さい、積極的なご援助をいただけることは、横浜工業会設立準備会にとって百万の味方を得たことになり、大変な難いことでした。

横浜工業会設立の為の募金を卒業生に対して呼び掛けを行っていた設立準備会としては絶大

なるお力添えをしていただいたことになり、これによって募金活動が順調に滑り出し、募金の成果が目に見えて挙がり始めました。その結果、皆様のご援助、ご協力と相俟って財団法人横浜工業会は設立され、横浜国立大学大学院工学研究科博士課程も設置され、先般皆様の許にご報告申し上げましたように、昭和六十一年七月一日現在、募金総額二億六八八二万五七三三円に達し、目標額の二億円を突破し、大きな成果を収めることができました。

これは卒業生の母校を愛する心が結実した結果ではありませんが、この事業の行方が海のものとも、山のものとも判断の出来ない滑り出しの時期における竹内先生の、横浜工業会設立に対する温いご援助が、本事業を成功に向けた起爆剤になったことは間違いないと信じております。竹内先生有難うございました。

(財横浜工業会常務理事)

竹内先生と私

電化昭十九年／九月 山 本 武

私は中学時代から先生の教えを受ける光栄に浴しました。併し先生の眼には出来の悪い生徒と

して映ったものと思ひ忸怩たるものがあります。

高工時代は誠に運の悪い時代に当り、正味二年間しか学校生活を送ることが出来ませんでした。それも一クラス八十名という大人数であり、余程特別なことでもなければ、先生の記憶に残る学生はいなかったのではないでしょうか。

昭和十九年の九月二十日に卒業いたしましたして、何の幸か一度も兵役につかず、終戦を迎えることが出来ました。その間工業学校に就職し、以来四十年教職にあり、一昨昨年退職いたしました。昭和二十八年の五月に転勤いたしましたして、横浜市立鶴見工業高校に勤めることとなりました。

この学校は創立当時の校長が鈴木京平先生という方で、高工の教授をされておられたようです。そんな関係からか、昼夜合せての教員の中には、高工卒業生が多く、私の後からも多数の方が勤務され、多い時には二十名近くいたことがあります。校長も四代目の堀野貞雄氏が建築科の出身で、昭和三十三年から四十五年まで、次の五代目が長谷川光次氏で、この方も建築科出身で三年間、更に七代目の桜井邦夫氏は機械科卒で昭和五十一年から五十七年迄勤められました。

私事になりますが、昭和二十九年に結婚しましたが、当時の住宅難で困っておりました。知人のご好意により、高工の事務におられた、上川内氏のご親戚の家に住むことが出来ました。これが竹内先生のお宅のすぐ近くでありました。そこに約二年ばかりおりました関係で、先生のお姿を拝見する機会は間々あったのですが、どうもまだ先生に声をかけるだけの自信がなく、失礼い

たしました。

処がこの間に家内が、竹内先生のお宅におられた武城氏の奥様と懇意になり、以後も交際が続けられております。

先程書きました様に、鶴見工高には横浜高工の卒業生が多く、毎年一回は横浜会と称して会合をもち、親睦を深めておりました。丁度桜井氏が校長であつた時に、この会合に竹内先生と石川房治先生のご両名をお招きし、会に加わっていただきました。それは私が弘明寺に居りました時から、二十数年経過した時でした。その間一度もお会いする機会がなかったのですが、その会では先生が私を記憶しておられた様で、大変感謝いたしました。又先生が昔と少しも変わらず、盛んに熱弁をふるわれたのには、又感激いたしました。

本当にお元気で、著述に、旅行に、会合にと活躍されておられることは誠に敬服のいたりです。一昨年から煙洲会に時々出席させていただいておりますが、毎回先生のお元氣なお姿を拝見出来るのが楽しみです。

いつまでも、お元気でご活躍下さいます様お祈りいたします。

先生と野球

電化昭三十四年 日月博紀

先生が、野球少年であつたことは、先生の著書『あの日あの時』を読んで知りましたが、更に先生が、高工で教鞭をとつておられた時代に、煙洲先生に高工の野球部長を勤めるよう強要され、昭和六年から二年間、野球部長をされたことを知りました。そこで、昭和六十年の横浜野球クラブ（高工、高商、国大の野球部員の同窓会で昭和三十四年に発足）の総会に先生を御招待して貴重な高工華やかなりし頃のお話をお聞かせいただき度いと考え、村松先輩にお願いして、先生に御都合をおたずねしたところ、快くお引受けいただきました。

総会の席上、参集した数十名の野球部同窓生と現役部員の前で、三十分間にも及ぶ、良き時代のハマの高工・高商の定期戦の状況をメッチェンの話も折りまぜて、話されました。先生の話しぶりは、御存知の通り、情熱的で、感銘深いものでありました。出席者には、五十年前のことが、つい昨日の如く目に浮んでくるものでした。先生の声が大きく、はつきりしており、年齢を感じさせなかったことも印象的でした。

翌、昭和六十一年の総会にも、御出席いただきましたが、一年前と全く変わらないお姿で、「あ

の強かった高工と高商が一緒に成った横浜国大の野球部が、強くないのは、不思議であるし、残念である。早く強く成ってほしい。」と力強く話され、改めて、先生の情熱に感銘を受けた次第です。

昭和六十二年を迎えましたが、今年もまた、横浜野球クラブの総会で先生が大声で情熱的なお話をされることを待ち望んでいる一人であります。

竹内先生と煙洲会

電化昭十七年／九月　村　松　四　郎

横浜高工新聞部の会というのが、電化昭十八卒中村弘氏、機械昭十九卒中山一郎氏等のお世話で毎年開かれるようになって既に二十年余にもなると思いますが、その会には新聞部の部長をされていた佐藤正能先生を始め、竹内秀雄先生、工藤先生に御出席を願ってお話をお伺いしていました。特に最高齢の竹内先生のスピーチは、話し方も内容も常に出席者の感嘆するところでした。

私が昭和四十一年から世話役幹事をしています毎月の煙洲会の会員の方々にも、竹内先生の心身共に御元気なご様子を知って頂きたいと思い、昭和四十九年七月頃からご案内を差し上げて殆

ど毎回ご出席を願って居ります。

先生ご自身が、胆石手術の為入院されていました夏の煙洲先生の墓参にはわざわざ今は亡き奥様が先生の代りにお出で頂いた事もありました。

特に昭和五十一年十二月の煙洲会の四百回記念スピーチを先生にお願い致しました処、「煙洲先生と横浜」と題された当夜のお話は実にすばらしいもので、ご出席の方々から絶讃を博した事は、今尚記憶に新しいところです。此の時のお話の内容に就ては、先に出版された同名の書籍の中に集録されていますので皆様ご存知のことと存じます。当時既に先生は満八十歳を超えて居られました。其の後も、

四三〇回 英文学三題漸

四四六回 『寄席の息子と英文学』出版記念会

四五二回 私の履歴書

四七一回 英文学こぼれ話

四八七回 先生米寿の祝

『煙洲先生と横浜』出版記念会

五〇二回 彗星綺談

『あの日あの時』出版記念会

五十一回 ハレー彗星とオーストラリア近況

と煙洲会に於ても度々卓話をお願いしてますが、先生のお話の時は常に会員の出席も多いようです。特に英文学に関するお話の時は「息子も聴き度いと言うので出席させてほしい。」と申込まれた会員も居られました。

煙洲会の席上、先生から御自身の健康法、或は記憶法としては、

▽歩くこと（手紙の返信はすぐ書いて自分で投函に行く）

▽うがいの励行

▽姿勢をよくすること（杖はなるべく使用しない。杖は身体の前より後につく）

▽朝起きる時、こめかみその他に指圧する

▽歴史的なこと等の記憶には一五〇〇年とか一八五〇年とか一定の年を基準として、その前後等につき記憶するようにして

等々のことをお伺いしたのですが、中でも昭和十五年以来、最愛の奥様がお亡くなりになられた昭和五十年頃まで続けられた毎朝の冷水浴びは到底余人の及び難いもので、先生の強固な精神の一端を示すものでありましょう。

又先生は若い頃、十二指腸潰瘍を患われて以来、無病息災というより一病息災と称されもして、自らの健康には十二分に御留意されておいでのように伺われます。

現在竹内先生は菅さんと共に煙洲会の顔的存在であります。先生が毎月の煙洲会にて会員の方にお会いするのを楽しみにされていると同様に、多くの会員の方々も先生の元気なお姿を見、お話を伺うのを楽しみにして出席されています。煙洲会幹事としても、皆様が出席を楽しみにされる様に会の運営に努めねばならないと、常に自戒している次第です。

早大文学部英文科を卒えて、成東中学校教師を経て横浜に戻り、米英留学後、商工実習校、横浜高工で教鞭をとるようになれば、名校長煙洲先生との出会いが竹内先生にも大きな影響を及ぼされた事だと思えます。煙洲先生の名教自然を校是とする自由啓発教育の良き理解者、協力者というより、煙洲先生教育理念に心酔されて、我々の教育に当られたものと思えます。又煙洲先生も学生の心身の良き指導者として、若い竹内先生を信頼して野球部長を始めとし学校内の数々の要職をお願いされた事でしょう。

御高齢の先生が数年前から人生に於てハレー彗星を二度見ようと考えられて、特に今回はわざわざオーストラリアまで出かけて行こうと発表された時、先生を知る総ての方々から大きな激励の波が先生をとり囲み、遂に実現でき、更に今回はその彗星日記を出版されるという事は先生の御人徳のしからしむるところであります。毎日の先生の健康管理の賜でありましょう。

先生は、私の今日あるは「師の恩と上よりのめぐみである。」と仰せられています。どうぞ、ますます御自愛されて、お元気な毎日を過され、何時までも煙洲会に御出席いただいて、会員に

「師の恩と上よりのめぐみ」のおすそわけをお願いして止みません。

著 者 略 歴

1896年 横浜に生れる
1918年 早大文学部英文学科卒業
1929年 横浜高工教授
1950年 横浜国大教授
1962年 同大学名誉教授
専攻 英文学
著書 「寄席の息子と英文学」
「煙洲先生と横浜」
「あの日あの時」

彗星日記

昭和六十二年四月十五日 印刷
昭和六十二年四月二十日 発行

著 者 竹内秀雄

〒232 横浜市南区大岡一の二四の八
電話〇四五―七三一―一三八二

発行者

煙洲会代表 菅 要助

幹 事 村松四郎

〒135 東京都江東区豊洲四の六の二

印刷所 株式会社 白橋印刷所